

あなたの笑顔
に魅せられて

阿門 遊

第一章 ある日の日曜日

「おんぎゃー、ふんぎゃー、あんぎゃー」

この世に生を受けたことに対する、怒りなのか、喜びなのか、あきらめなのか、様々な感情の玉手箱を爆発させたような、声分娩室に響き渡る。

「お母さん、産まれましたよ、あなたのお子さんが」

女は、助産師に抱かれた、自らの命と交換することさえ厭わないほどの、必死の思いで産み落とした我が子を一目見ようと、此岸に踏みとどまったまま、やっと眼を見開く。白いタオルには、まるまると太って、あどけない顔をした赤ちゃんが、いるはずなのに、見えなかった。

女は、意識をはっきりとこの世に戻し、目を大きく見開いたが、焦点がまるで定まらない。驚く女に、医者がやさしく囁く。

「あなたのお子さんの姿は、私どもには、見えませんが、お母さんには、きっと存在が感じられるでしょう」

女は、まだ、産みの苦しみから、解放されていないのかと思い、現実への対応力への術を見出せないままだった。

「私の赤ちゃんは、どこなの？見えないのにそこにいるの？まさか、と・う・め・い・・なの？は、だ、か、の、お、う、さ、ま・・・」

女は、意識が再び薄れていくのを感じた。もうこの世には、戻れないと感じながら。

第二章 ある日の月曜日

俺は透明人間だ。正真正銘の透明人間だ。何、俺の姿が見えないから、確認のしようがないだって。それは当たり前だ。見えないからこそ、透明人間なのだ。もし、俺に尻尾があって、俺の透明の技術がまだまだ未熟で、尻尾だけが見えることなんてなれば、問題だろう。それなら、お前は、ひょっとしたら、俺が狸か狐かじゃないかだって？冗談は、よしてくれ。狸や狐が、自分のネタがばれるようなことはしないはずだ。それに、狸や狐を馬鹿にしてはいけない。狸や狐だけに、馬鹿じゃないだって。それはそうだ。言葉遊びは止めておく。

俺が言いたいのは、狸や狐は、民話では、ある時は、主人公、ある時は、主役を支える名脇役、ある時は、敵役として、登場しており、人間とは、切っても切れない、近い存在なのだ。また、時には、信仰の対象にもなっている。狐や狸が祭られている神社は、日本中、至るところにあるはずだ。人は、死して、名を残し、虎は死して、皮を残す。狸や狐は、死して、神となり、透明人間は、死して、脱ぎ捨てられた服だけ残す。誰だ、こんなところで、ストーリーキングをしたのは？との、非難めいた声が聞こえてきそう。俺も、いつかは王、裸の王様となれるのか！

それはそうとして、俺が何故、透明人間になったのかだって。そりゃあ、企業秘密だ。とにかく普通の人間から見ると、全く見えないらしい。もちろん、俺自身が自分を見ても全く見えない。もし、透明人間に仲間がいたとしても、全く見えないだろう。こんな俺だから、普通の会社勤めはできない。また、透明人間だなんて、うっかり口に出してみろ、異人さんに連れられて、どこかの見世物小屋にでも売られてしまう。ははは、見世物小屋だなんて、俺も年齢がばれてしまうな。

昔、地元の神社の秋祭りのときに、近くの空き地に、どこからともなく大型トラックがやってきて、あっという間に、テントを立ち上げ、狼少年や大いたち、ろくろ首の看板が立ち並んだものだ。その頃から、透明人間だった俺は、木戸銭を払わずに、閻魔大王が座る入り口を、誰にも咎められることなく、正々堂々と、潜り込んだ。中身の様子だって？それは、俺の無銭入場と同じくらい、時効ものだ。大きな板に血糊のついた（多分、赤い絵の具だろう）大いたち、肩車された片方が、土台の仲間の肩に立つ、ろくろ首、この見世物小屋が、ありもしないことを大袈裟に、さも実在するかのように、わめきちらす、狼少年と、すべて役者が揃っていた。

だが、今も昔も、騙されていたと分かっている、つい、心躍る気持ちを抑えながら、近所の子供たちは出向いたものだ。そんな気持ちは、いつの世でも、人にとって大切な宝だ。好奇心のないところに、進歩・発展はありえない。見世物小屋で熟成された未知への憧れが、世界最高峰の山への冒険、南極、北極への極地の制覇、果ては、月や火星など、地球を離れた、宇宙への挑戦に繋がるのだ。だからこそ、透明人間である俺のこれからの告白も、楽しみながら読んで欲しい。少し、我田引水か、はっ、はっ、はっ！

それじゃあ、お前の仕事は何だって？よくぞ聞いてくれた。俺の職業は、俺の体を使った商売、まさに、手に職をつけたというより、手が勝手に商売に適していたもの、常に前向きの、行進じゃなくて興信所、つまり、私立探偵だ。探偵だなんて言うと、聞こえはいいが、小説や映画、テレビなどで出てくるような、カッコいい仕事じゃない。台風が接近して、大雨警報の出ている

る日も、冷たい木枯らしの吹く風の日も、思わぬ大雪で、電車など公共交通機関がストップして、道路では、スリップした車が衝突している日も、余りの暑さに、自分の周りに汗のプールができる日も現場に出向き、汚い、きつい、給料安い、気分が悪い、着るものがいない、いや、これは俺だけのことか、という悪条件で、仕事に望んでいる。とにかく、ろくな仕事じゃないってことがわかるだろう。

それじゃあ、何故、そんないやな仕事をしているのかって。透明人間なら、透明を利用して、盗みなど様々な悪事を働けば、金儲けなんか簡単だと思うかも知れない。いやはや、その通りだ。宝石店とか銀行などの金融機関に行けば、金目のものや札束だって、取り放題だろう。でもよく考えてみる。俺は確かに透明だ、他の人間からは見えない。でも、俺が盗ろうとする宝石とか紙幣までもは、透明にできない。また、透明にしてみろ、そんな宝石とか紙幣なんか、一般には使えないじゃないか。

店の中で、宝石や銀行券だけが空中に浮いて、もちろん、マジックショーじゃないぞ、俺がただ掴んでいるだけのことだが、どこかに行ってみろ。そりゃあ、誰だって、目を剥き、口をあぐりと大きく開けて、顔色が蒼白になるくらい驚くだろう。もしくは、宝石や札束が、一日中、部屋にいたから、気が滅入って、気分転換に、外の空気を吸いに行っただろうと気に止めない人もいるかもしれない。そんな奴は、いないか、はっ、はっ、はっ、はっ。

店員やお客さんは、最初、驚愕のあまり、体の動きが止まっても、そのうちに、この空飛び紙幣を掴みに来るだろう。お金の管理に、第三者がいれば責任感の強い従業員や、長年の低金利政策で、利子の配当に不満を持っていた客が、これこそ、銀行の浮いたお金だと利子分を取り戻そうする者、ただ単に、空調のきいた部屋で涼もうと店に入った通りすがりの人が、俺にも、金運が振ってきた、週刊誌の占いも、まんざら、当たらないこともないなと思ひ、あわよくば、お金を持ち逃げしようとする者、お金目当てじゃなくて、この紙幣に乗って、遠くアラブの王様に会いに行きたいと願う者など、金を追ってくる理由は様々だろう。とにかく、俺は、そんなことはしない。手堅く、一歩、一歩進むだけだ。

おっと、前へ進むのはいいが、誰だ、俺の肩にぶつかっておきながら、謝りもせず、行き過ぎようとするのは。ふざけるな。一体どこ見て歩いてやがんだ。この俺が見えないのか。見えなくて、当たり前か、俺は透明だからな。だが、心配するな。この俺だって、風呂も入るし、トイレにも行く。風呂に入ると体だって洗うぜ。そんな時なんか、一発で捕まってしまう。それも裸のままだぜ。恥ずかしいたらありゃしない。

透明人間のくせに裸がはずかしいのかだって。そりゃあ、恥ずかしいに決まっている。恥ずかしさは、文化の一つだ。自分の家で、風呂上りに、裸で、部屋中、歩き回っても、何も恥ずかしいことなんかない。かえって、開放感からか、気持ちがいい。その代わりに、家の外だと、パンツも見せられない。まして、パンツを脱いだ人間なんて、すぐさま、御用となる。でも、大丈夫、留置場に入れられたら、ちゃんと、パンツぐらいは貸してくれるだろう。でも、そのパンツ、ちゃんと洗ったパンツなのかなあ。

外で裸になる奴なんて、俺以外に五万、いや十万というはずだぜ。そんな奴が履いたパンツなんて、俺は、履けないよ。どんな病気がうつるかも知わからない。俺だって、実は、秒な持ちだ。

病気だって、普通の病気じゃない。透明人間自体が病気なんだ。でも、もし、俺の履いたパンツで、他の誰かに透明人間病がうつたらどうなるのだろう。まだ、体全体が透明化すれば、それはそれで、何とかなるだろうが、パンツを穿いた部分だけが透明化したらどうなるだろう。

街一の繁華街、中央商店街をストーリーキングで闊歩しても、猥褻物を自主規制で隠している以上、当局からのお咎めはないだろう。返って、率先して、お上の指導に従っているわけだから、お褒めの言葉を頂くかもしれない。統治者たちは、片方で、規制緩和を勧めながら、片方で、自主規正と言う名の、無言の圧力をかけてくる。

だが、人間、どちらに転んでも、状況に応じ、たくましく、強く、生きていけるものだ。いやに楽天的だって？この透明人間の俺にだって、心配事のひとつやふたつ、三つに四つ、五つに六つ、と手の指と足の指では、数え切れない以上の悩みや心配事はある。その点では、俺も、みんなと同じように、普通の人間なのだ。凡人の仲間さ。

透明人間のくせに、凡人だなんて笑わせてくれるね、と思うかもしれない。でも、いいじゃないか、それぐらいの謙虚さがあつたほうが、人間好かれるからね。仲間から、他人から、好かれるのが一番。普通の人間なんて怖いよ。少し目立つと、すぐさま、足を引っ張ってくる。人が活躍していると、必ず、弱点をついてくる。いかにして、他人を笑うことしか考えていないからね。自分を笑って、その場を盛り上げる芸当なんか、これっぽっちもない。ひたすら、他人をこき下ろして、自ら浮き上がらせ、目立たせようとする輩ばかりだ。

そう言う意味で言えば、俺なんか、大丈夫。あまりに、変わりすぎていて、誰も相手にしてくれないし、誰も彼も俺を許してくれる。でも、俺だって、小心者だから、気を使っている。気を使っているのに、使っていないそぶりを見せるのが、プロ足るゆえんである。

例えば、自分を笑うことで、なんとか、この表面上見える人間の世界に踏み止まっていられる。それを忘れるとあつという間に地獄行き。本当に相手にされなくなるからね。昔誰かの本で、読んだことがあるけど、「一人の孤独は寂しいけれど、二人の孤独は地獄だわ」というセリフには、泣かされるね。まさしくこうなっちゃうよ。

詰まるところ、透明人間は、マイノリティとしての生きていくことが大変だということさ。もちろん、あなたたち、普通の人間も、大多数であるがゆえに、やれ個性だ、独自性が必要だとして、常に何かを求められている点で、生き辛い時代なのか知れない。いやはや、愚痴っぽくなってしまって、互いの傷を舐め合う有様になってしまった。さあ、独り言クラブは卒業して、仕事、仕事、俺が唯一、俺として存在できる場所へ行こう。

さあ、着いたぞ。ここが、俺の事務所。俺の城。俺の館。俺の本陣。俺の本拠地。なんだって、普通の事務所じゃないかだって。見てきたような、本当のことを言うじゃないか。当たり前田の自転車屋。しまった、このところ、過去のCMを調べているせいか、古典的ギャグをかましてしまった。失礼。失礼。

いくら、探偵が、透明人間だからといっても、事務所は、普通だ。事務所までもが、透明だったら、お客はどこに頼めばいいのかわからない。俺に頼みたい人がいて、念ずれば、すぐに出向ければいいが、俺は、別に、超能力者ではない。ただ単に、体が透明なだけだ。正真正銘、普通の透明人間だ。

透明人間友の会のメンバーの一員だが、今まで、総会に行ったことはない。この広い日本に、百人以上も透明人間がいることは、会員メンバーからわかる。互いに、電子メールでのやりとりもしているが、実際に、年に一度、総会でも開き、全員集まって、名刺交換でもできればいいんだろうが、いざ、集まったとしても、全員が透明だから、集まったかどうかわからない。透明人間同志だって、お互いが見えないのだ。だからこそ、透明人間なのだ。体に、天狗印の透明になる灰でも塗っていて、必要な時に、透明になれば、本当はいいのだろうが、生まれて方これまで、ずっと透明だったのだ。

じゃあ、俺が、どうして、透明に生まれたかだって？それは、俺にもわからない。あんたたち、普通の人間だって、同じだろう。自分が、少し固めで、シャンプーした翌日は必ず、仁王のように先立ち、慌てて、毛を水で濡らし、香川オリーブガイナーズの帽子を被らなければならないような髪の毛に生まれてきたわけじゃなかったろう、また、まん丸お月様のように、いつも見開いていて、どうしてそんなに驚いているんですかなんて、初対面の人に言われるけれど、視力は、両目ともに、0.02。形あるもの、すべてがぼやけていて、世界が溶け込んでいるように見える目に生まれてきたかったわけではなかったはずだろう？

また、ひもがついているわけでもないのに、人からは、ダンボと同じだね、ちょっと動かしてみてもよ。空が飛べるはずだなんて、からかわれるような幸福の耳ぶたになりたかったわけでもない。次に、何、もう、いって。せつかく、ここまで来たんだ。鼻と口のこととも紹介させてくれ。

ちゃんと二つ穴はあり、呼吸するのも、臭いを嗅ぐのにも、なんら影響はないのに、ほんの少し、低いというだけで、雨が降ったときに、水は溜りませんかなんて言われる、世界にひとつだけの鼻。ああ、空気を吸い込まないでくださいよ、あたり一面が酸素欠乏になって、頭がふらふらするじゃないですか。あなただけの空気じゃないんですよ。タダだと思ったら、大量消費するその性格何とか直していただけませんか。それよりも、早く、早く、救急車をコールしてくださいよと言われるようなおちょいぼ口からは程遠い、大きな口。

すべて、生まれてきたあなたが選んだわけじゃない。あなたのせいではない。なのに、全てが、あなたの責任のようになすりつけられる。えー、今、言った項目すべて、あなたには当てはまっているのですか。それはすごい。それならば、この透明人間の私よりも、希少価値がある。ここからの主人公はあなたに変わるべきだ。「少し変わった、普通の人の憂鬱」なんて題は、どうだろう。残念ながら、職業が探偵じゃないから、辞退しますだって。

俺だって、好きで探偵になったわけじゃない。自分の特性をフルに活かせる仕事が無いかと思って、この仕事を選んだわけだ。いや、またまた、失礼。本当のことを言おう。ほかに、食っていく手段がなかったんだ。とにかく、私が言いたいことは、結局、透明人間も普通の人間であり、なんらあなたたちと変わらない。ひょっとすると、今、この文章を読んでいるあなた以上に普通なのです。そして、透明であることは、ひとつの特徴ではあるが、それをもって、特別扱いをして欲しくないということだ。

話は、長くなった。本来の、ストーリーに戻ろう。このまま、あなたと話をしていたら、私はあなたの世界には入りこんでしまうだろう。ほら、誰かが、肩を叩いている。でも、振り返っ

ても、誰もいない。そう、透明人間の私がマッサージをしているのです。なんて、誰も怖がらないか。

さあ、話に戻ろう。事務所には、ちゃんと、受付嬢もいる。名前は、宮崎 久美子。愛称、クミちゃん。仕事の段取りはすべて彼女に任せている。クライアントからの連絡もすべて彼女。だって、透明人間の俺が、電話ならいいが、直接対応したら、相手は驚いて、事務所から逃げ出してしまう。仕事が、また、一件、青い鳥のように、空高く、逃げ出してしまう。そうなると、驚くのはこちらの方だ。せっかくの顧客がただ驚くだけ驚いて逃げてみる。俺は何のために仕事をしているんだ。この事務所は幽霊屋敷じゃない。ただ単に、驚いて逃げるのだったら、木戸銭や賽銭代わりに、金ぐらい置いていって欲しいと言いたいね。事務所の維持費だって馬鹿にならない。

そんな理由だから、客の相手は、基本的には、全部彼女任せ。もちろん彼女は透明人間じゃない。ちゃんとした普通の人間。何がちゃんとしているかと言えば、目も、鼻も、口も、耳も見えているという点だ。鼻にシリコンを入れて、少し高くしていること、まぶたを二重にしていること、顔のえらを気にして、ほほ骨を少し削っていること、その他、原型が分らなくなるくらい、整形していること、それは俺の知ったことじゃない。

面接したときには、既に、この顔だったし、俺は、他人の顔を、いや、過去を問わない主義なのだ。待てよ、今、いい事を、思いついたぞ。透明人間の俺が整形手術をしたらどうなるんだろう。物体として存在するが、他人には見えない、他人には気がつかない顔を気にして、どうなるかだって。それは、それ。これは、これだ。透明人間じゃなくても、存在自体が透明な奴は、たくさんいる。

そんな奴に限って、化粧が妙にうまかったり、服選びが入念だったり、アクセサリーを、手の指から、首、耳、鼻、果ては、おへそなど、体中に穴を開けてまでも、身に着ける。透明人間の俺からしてみれば、誰も、あんたに注目していないよ、気にもかけていないよ、あなたこそ真正銘の透明人間だと叫びたくなる。

おっと、あれこれ、無駄口を叩いている間に、俺の事務所に到着だ。お城の門が、いざ開かれん。開け、ドア。宝は、そこに。姿は見えずとも、音が俺の存在を誇示してくれる。

「おはようございます。」

おっ、いつ聞いてもいい響きだ。朝でも、昼でも、夜でも。いつでも、年中、クミちゃんは、「おはよう」の言葉を掛けてくれる。俺が事務所に入ると、いつも、さわやかな挨拶で迎えてくれる。透明人間の俺にとっては、かけがえのない友人で、理解者で、仕事のパートナーだ。彼女は、俺が見えている訳じゃない。俺が部屋に入ってきたら、雰囲気わかるそう。まあ、長年一緒に仕事しているから、通勤途上のカフェで、モーニングをしっかりと食べて、脳に炭水化物のパワーが充満していれば、朝飯前じゃなく、朝食後に、最大限の能力を発揮できる。もちろん、ひとりでの、ドアが開き、そこに誰もいなければ、俺（透明人間）だってわかるのは、当たり前の話だが。

「今日は、朝から暑いですね。冷たい麦茶をどうぞ」

俺は、ありがとうと礼を言い、一気に飲み干す。

いいね、いいね、昨今の、男女雇用機会均等法とやらで、会社では、女性社員がお茶を入れてくれなくなっただけだが、この会社では、社長である俺に、お茶を入れるという習慣が残っている。もちろん、二人しか、いないのだから、どちらかがお茶をいれるのは当然か。その代わりに、このあと、俺が、クミちゃんのために、コーヒーをいれる。社長だからといって、威張っているわけにはいかない。二人しかいない以上、お互いの気持ちを思いやるのが大事だ。法律以前の、一般常識、道徳だ。

おっと、朝から、自己中心で、他人を思いやるという意識が欠けてきている、現在の日本人に対する、怒りや不満の気持ちが高ぶってきた。あまり感情を爆発させすぎると、体までが膨張し、漫画の超人のように、着ている服を破りってしまう恐れがある。冷静に、沈着に、裸の体と心を冷やそう。

落ち着いてきたところで、さあ、着替えだ。俺は、事務所にくると、ワイシャツをはおり、ネクタイを締め、背広を着こなす。窓口では、クミちゃんが対応してくれるが、込み入った話になるとそうもいかない、俺が直接、対応する。決して、部下に投げたりしない。功績は部下に、責任は上司が、これが、俺のモットーだ。

それに、秘書のクミちゃんだって、俺が服を着て実存化しないと、相談をしようにも、どこに向いて話しかけるか迷ってしまう。狭い事務所の中で、二人かくれんぼしても仕方がない。俺の方だって、服を着ることで、何か、自分が一社会人として認められたような気がする。裸の王様じゃなくて、服を着たい透明人間。何だか、変だね。

「先生、今日は、午前十時に予約がはいっています」

先生か、少しその呼び方は、照れくさいので、クミちゃんには、何度も、やめてくれるよう話をしたが、「だって、先生は、探偵でしょう？今は、透明、いいえ、無名だけれども、そのうちに、警察も匙を投げた迷事件を解決し、有名になるのに決まっています。その時になって、急に、先生と呼んだら、何だか、舌が回らない気がするんです。だから、今のうちに、先生と呼んでいたいんです。先生は、私の誇りです」とまで言われたら、俺として、「はい、わかりました。クミちゃんのおっしゃるとおりにします」としか言いようがない。

さて、今日の相談者か。自分だけでは解決できない仕事や家庭の問題を、困り果てた末に、探偵の俺に相談したい人が、土曜・日曜日の休みが明けの心を待ちにしている。本当に、ありがたいことだ。今週もいいことがあるように願って、早速、彼女が事前に、クライアントから話を聞いて、調書にしてくれた書類に目を通す。

何、なに。今朝一番の客は、八十過ぎの女性か。相談内容は、亡き夫のこと。まさか、黒魔術か、ブードー教の秘術を探し出して、死んだ夫を、ほんの三十分でもいいから、生き返らせてくれというわけじゃないだろうか。生き返った人間に、庭の片隅に埋めたはずの、金の延べ棒やダイヤモンドを始めとする宝石などの財宝のありかを尋ねるとか、五十年前の、浮気の証拠を突きつけて、自分があの世に行く前に、いくらかでも有利になるように、とっちめてやるとかじゃないだろうな。

まあ、まだ、依頼者が来るのには、一時間も余裕がある。とりあえず、最初の三十分間は、今日一日のこと、今月のこと、今年一年のことを、ゆっくりと考えよう。探偵稼業は、マクロ的視

点で物事を見ることも必要だが、魂のあるまま、空に舞い上がり、俯瞰的立場で、見渡すことも必要だ。とかく、仕事に埋没して、蝸壺人生を見直すことが、自分だけじゃなく、お客様にもいい結果をもたらすことになる。と、思った瞬間、

突然、ドアが開く。いい試みには、必ず邪魔が入るものだ。クミちゃんの顔があせっている。

「先生、クライアントの方が来られました。予約よりも少し早いのですが、よろしいですか？」

さすが、クミちゃんだ。予定よりも早く来たクライアントを責めるわけでもなく、思索中を妨害された俺にも気遣ってくれている。しかし、人生は、いつもこうだ。一度、自分のことをゆっくりと考えなければならぬときに限って、早急の用事が舞い込んでくる。その解決を巡って、また、ドタバタが繰り広げられ、ボタンキューの音が鳴り響き、大地と顔面キッスをしたかと思うと、あの世行きだ。透明人間の俺に残せるものは何がある。

とりあえず、自分のことはさておき、俺は、急いで、身支度にかかった。見えない体を、見えるように背広で覆う。その代わりに、俺の心に、仕事バージョンの鎧を身に着ける。ついでに、声色も七色に変えて、

「さあ、お入りください」

ゆっくりとドアが開く。緊張の一瞬だ。これまで何人の人が、この事務所を、俺の相談室を訪れたらろうか。何度経験しても、最初に訪問者と出会うときは、心がキュッとこわばる気がする。心臓が、血液を送るのを、迎えるのを、一事、停止するような気がする。息詰まるこの瞬間。いざ、いでよ。気分が高まっているのに、クライアントの姿は見えない。静寂のひと時。一体、何がおこるのか？誰が現れるのか。嵐の前の静けさ。嵐を期待しているわけではない。口の中が、カラカラと乾いてきた。音がするわけでもないのに、カラカラとは、変な表現だ。昨日の浴びるほど飲んだビールがまだ残っているのか。脱水状況から、脱却を図る。

とにかく、お茶を一杯口に含む。ドラム式洗濯機のように、ごろごろ、ごろごろ、ごろごろ、ごろごろとお茶を口の中で回転させ、吐き出すことなく、喉に流し込む。少し、生温かい。唾液の準備は整い、亀裂のはいった大地は、緑の種子の到来を待ち望んでいる。固唾を飲んで、見守る。

その時、一台の、車椅子が、舞台の下手から、部屋の角にぶつかりながら登場してきた。貧乏探偵社のため、障害者には、やさしくない間取りである。人が喜んでもらおうとしている事業なのに、（俺だけが慈善活動のつもりでいる）人にやさしくない事務所で業務を執り行うことは、如何なものか。あこぎなまでもして、利潤を貪り、表面上は、人にやさしい、親切だということを出したほうがいいのかどうか、悩むところだ。椅子に座ったまま、腕を組んで思案顔の俺に、来訪者は語りかけ始めた。

「探偵さん、もう、あたしのために心配してくれているんですか、本当に、ありがとうございますねえ。でも、まだ、何もしゃべっちゃいないのに、そんなに難しい顔されたんじゃあ、解決できない仕事を頼んだようで、言い出すのが難しくなっちゃいますね」

調書で読んだとおり、八十を何日か、何ヶ月か、何年か過ぎた女性が、俺の目の前にいる。顔には深い皺が刻みこまれて、笑っているのか、怒っているのか、第三者には、認識しがたい。あの皺に、鉛筆を差し込んだら何本挟めるのだろう。五本、十本、いや、百本か。そんな馬鹿な。

顔中、鉛筆ミサイルだらけとなる。隣国のポテドンが飛んできたところで、鉛筆やりで、見事打ち落とせそうだ。それとも、「顔に鉛筆はさみ百本、ギネスに挑戦」に参加するように、推薦してみようか。

それほど、目の前のクライアントの皺には、何か、俺を妄想の世界に引き込む強い力がある。グランドキャニオンじゃないけれど、顔の皺の谷へ落ち込んでしまいそうだ。落ち込んだら最後、二度と、この世には戻れない。残りの人生を、老婆の皺の中で過ごさなければならない。「皺の男」そう、今日から、俺を皺の男と呼んで欲しい。老婆の皺に包まれて、安楽な日々を過ごしたい。いかん、いかん、とんだ白昼夢だ。俺が、まじまじと、しかも、呆けた様に、老婆の顔を見つめていると、

「探偵さん、あたしの相談するのは、そんなに難しいものじゃないですよ。優秀な探偵さんなら、ちょちょいのちょいで、解決してしまうもんだと思ういますよ。これから、あたしが話すことを聞き終えた瞬間には、多分、自動販売機の缶ジュースのように、答えが転がり落ちているでしょうねえ。その缶ジュースを飲み干したとき、あたしの問題は解決しているんでしょう。それじゃあ、話しますよ。いいですか？実は、あたし、冷たいようだけど、あの人が死んでから、いっぺんでも夢であの人のことを見たことがないんですよ。何故なんでしょうねえ。あら、ごめんなさい。あの人だなんて、言ったところで、探偵さんにはわかりはしないですよ。つまり、この人ではなく、その人でもなく、結局、どの人なんでしょう。顔までも、忘れてしまいましたよ。最近、もの忘れがひどくなってしまい、自分が今さっきしゃべったことさえ忘れていくんですよ。そして、しゃべったかどうか、口を動かしたかどうかさえも忘れてしまうんですよ。例えば、映画で、主人公の乗っている列車が、猛スピードで駆け抜けている。敵が、主人公の命を狙って、飛行機から列車を攻撃します。だけど、ミサイルは必ず、列車には当たらず、列車が過ぎたレールに命中して、線路がどんどんと崩れていく。そんなハラハラドキドキのシーンがありますよね。まさに、その場面のように、あたしの記憶が消えていくんですよ。もちろん、あたしの記憶が失われていくことに対して、周りのみんなが、心配して、ベッドの傍で、あたしの手を握り締め、固唾を飲んで、見守ってくれているなんてことはないし、まして、ガンバレ、ガンバレの応援の声も期待しちゃいませんけど。とにかく、そんなようなものです。あら、話が、昔のレコード盤のように、数十秒飛んで、その間の台詞がわからなくなっちゃったみたいね。あたしの記憶がすべて消え去ってしまうまで、あと残された日は、何日でしょう。人は、どこからともやってきて、地球という仮の宿で、三万泊三万一日程度過ごし、再び、どこかへ旅立つんだと例えられるじゃないですか。それなら、あたしの宿泊日数は、あと何日でしょうねえ。それが何日だろうとしても、一日一日を大事に積み重ねて、人生という名の航海を無事終えたいものですよ。そう、そう、話はあの人のことですね、あの日、あの頃、あの場所で、あの時間に、あの人と出会ったんです。つまり、夫であり、旦那であり、主人であり、相棒であり、相方であり、パパであり、いい人であり、よくなかった人であり、最終型として、遠くへ行ってしまったあの人なんですよ。指示語じゃ、わからないですよ？名前ですか？そうね、名前はあったかと思うけど、今となっては、位牌の十文字が、あの人の存在した証拠じゃないんですか。でも、あたしゃ、位牌なんてはいりはいらない。葬式なんてして欲しくない。まして、あの人と一緒にお

墓に、仏壇にはいるなんて、想像すらできないですよ。つまり、最近、それぐらいあの人のことを毛嫌いして、四十数年間、一緒に暮らしたはずなのに、思い出のひとつも夢の中に出てこないんですよ。あの人との記憶の扉を封じ込めて、思い出すことを拒否しているんでしょうかねえ。だからと言って、あたしは、ひとでなしなんかじゃありませんよ。それよりも、あの人こそ、ひとでなし、鬼畜生、糞くらえですよ。あら、ごめんなさい。つい、感情的になって、私の中の男の部分が出てしまいました。でも、若い頃なんか、あの人に、口に出せないほど、ひどい目にあわされて、いつ別れようと思ったかわかりませんよ。仕事から帰ってくると、既に、酔っ払っているし、食事のときは、一升瓶を片手に、酒をつまみに、酒をあおる。ちょっとでも、あたしの作った料理が気に入らなければ、ちゃぶ台をひっくり返す始末。でも、あたしだって、負けはしませんよ、ひっくり返されたお茶碗をあの人に向けて、投げつけてやりましたよ。あの人が酔っ払っていても、運動神経はいいから、お茶碗は見事によけたけど、先を見通す能力はないから、中に入っていたご飯はよけきれずに、顔に当たっちゃいましたよ。今で言う、パイ投げみたいなもんですかねえ。へへーん、ごあまあみろですよ。あら、ごめんなさい。また、心の中の男が出てきた。まあ、別に、あの人のことを思い出したいわけじゃないんですが、あたしもそろそろ年だし、あの世に行く前に、もう一度、あの人に会って、喧嘩のひとつも遣り合いたいんですよ。それなのに、あたしがあの人のことを思い出さないのは、夢の中であの人を落っこしちまったんじゃないかと思うんですよ。あの、探偵さん、私の夢の中の、あの人を探し出してくれませんか。探し物は、夢の中ですよ、うっふふふー」

やめてくれ、八十の婆さんの投げキッスなんか、まともに受けられない。近くにある扇子で、打ち返してやる。俺が透明人間だとしても、実体はあるわけで、感情だってまともに受けざるをえない。見た目だけの透明なんて、本当の透明じゃないのかもしれない。ガラスと同じだ。傷つくこともあれば、割れることもある。

ただし、俺は、お取替えできない。持ち運びには、天地有用で、やさしく取り扱って欲しい。とにかく、今日は、なんて日の始まりだ。夢の中のじいさんを探し出してくれないかだって、SF小説か、SF映画じゃあるまいし。たしか、昔、見た映画の中で、サイコピラーが、自閉症の子供を助けるために、頭にヘッドギアを装着して、依頼者の脳の中に侵入する映画を観たことはあるけど、俺の事務所には、そんな、機械はない。

もし、万が一、そんな夢物語みたいな機械が入手できたとしても、俺が、あのばあさんの頭の中に潜入したいとは思わない。夢の中のあの人を探してくれなんて、ちょっと洒落ているけど、現実には、無理だし、どちらかと言えば、精神科医や保健師、心の相談員にでも話をしたほうがいいんじゃないか。俺は、そう決断し、ばあさんにやさしく語りかけた。折角の客だが、出来やしないことまでも、請け負うわけにはいかない。透明探偵の名に恥じる。

「お客さま、亡くなったご主人さんのことを探してくれとおっしゃいますが、十分、ご主人さんのことを思い出されていますよ。特に、夫婦喧嘩のことについては」

「あら、そうだね。つい、興奮して、思い出しちゃったよ。ありがと、探偵さん。また、どうかあの人を落としてきちゃったら、探偵さんの所へ来ますよ。」

「いえいえ、どういたしまして。遠慮なく、おいでください」

老婆は、喜びを隠せない表情で、車輪付のキントン号に乗って、部屋から出て行った。俺も老婆も、クミちゃんも、この世の人全てが、お釈迦様の手のひらで、右往左往しているのじゃないだろうか。探し物は、見つけたいのか、見つけたくないのか。答えが見つからない。

老婆の相手をしている間に、あっという間に、昼となる。お腹が背中にくっつきだした。あまりに、すきっ腹になると、お腹が背中を突き抜け、俺を向こう側の世界に無理やり連れ込むおそれがある。そうなれば、傷害致死の犯人として、俺のお腹を俺が逮捕しなければならなくなる。自分で自分を処分する。自画自賛じゃなくて、自我崩壊だ。

そんなことが起こらないように、その前に、年の功で厚くなった面の皮じゃなく、不平不満のガスで充満した腹の皮を、引っ張り上げる。例え、その姿が不恰好だとしても、透明のお腹と背中とは、誰にも見えないはずだ。状況に応じて、欠点も長所となる。今日一日、また、賢くなった。昨日よりも、今日。今日よりも、明日。明日、天気になあれだ。ひとまず、安心。安心すれば、よけいに腹が減る。腹が減ると、背中を突き抜ける。どうどう巡りで、お馬が通る。

その時だ。突然、俺の右腕が痛み出した。左腕で右腕を握る。猛烈な痛みだ。痛みを耐えかねて、こんな腕なんか引きちぎってしまった方がいいと思えるほど、我慢しかねた時、苦痛が治まった。必死の形相に微笑が戻る。

つぶっていた目を開けると、そこには、俺の手が、俺の右腕が見えていた。そこには、俺の右腕が宙に浮き、ブラウン運動のように、ブランコの揺れるように、ぶらんぶらんとしている。遺憾、遺憾、何のひねりもない、直接的過ぎる表現だ。もう少し、カーブか、シュートか、ホークか、消える玉か、隠れた、粋な、言い回しが必要だ。これでは、おやじギャグならぬ、おやじ言葉だ。

それは置いておいて、俺の右腕の話に戻る。ちょうど肩の付け根の所からくっきりと、右腕が見えている。もちろん、生まれて初めて、俺の右腕を見るわけだから、本当に俺の右腕だかどうか分からない。ただし、指を曲げると俺の脳が指示すれば、ちゃんと指は動く。俺の頭をかけと命令すれば、ちゃんと腕をあげ、指が俺の頭を搔いている。

こうした状況から判断すると、やはり、この見えている右腕は俺の腕だ。うれしい反面、待てよ。待て、待てだ。右腕が見えるということは、俺は、透明人間ではなくなったということだ。いや、違う。一部透明人間だ。八割、九割、透明人間だ。俺は、普通の人間でもあり、透明人間の仲間である。集合の円を描けば、ちょうど両方に重なっている部分だ。そんなこと言っている場合ではない。今後のことを考えないと。この右腕が見えたままの状況で、このまま探偵の仕事が続けられるのかということだ。

「先生、どうしたんですか。」

俺の苦痛を耐え忍んだ呻き声を聞きつけたのか、クミちゃんが、部屋に入ってきた。

「いや、なんでもない。こともない。これを見ててくれ。私の右手だ」

俺は、取って付けたように空中に浮かんだように見える、俺の右手を空高く差し出した。

「あら、右手じゃないですか。色でもぬったんですか。それとも、手品ですか。ひよっとしたら、マネキンに人形だったりして。先生も、人が悪いですよ。それとも今、殺人事件の犯人探しを

していて、トリックがわかったのですか。それなら、そうと、私を、ワトソンさんとか、眠りの小五郎とか、呼んでいただけません」

色を塗ったんじゃないし、手品でもない、まして、殺人事件でもない。手品なら、ハンカチぐらいかけて、相手に期待をいだかせるよう、おもむろに見せるはずだ。こんな、素っ頓狂な見せ方なんかしない。殺人事件だって、俺が、そんな、危険な目に合うよう場所に行くわけがない。透明人間、危うきに近づいたとしても、相手は、俺をわからない。少し、悦にいる。

いかん、いかん、俺は、何を考えているのだ。体は見えるが、心は透き通るほど純粋なクミちゃんに八つ当たりをしてはいけない。それとも、体が透明な分だけ、心が曇っているのか、俺は。二兎追うものは、両手に空虚。神は、全てを与えたま給わん、奪い給わん。この、無いものねだりの、あればあるだけ強欲となる唐変木よ！ちゃんと見えるんだ、この右手が。俺は、もう一度、クミちゃんに説明した。今後の、探偵稼業のことについても。

「いいじゃないですか。おめでとうございます。大丈夫、大丈夫。あら、私、何を言っているのかしら。とにかく、驚いちゃって、片言の単語や感嘆符でしか話せなくなっちゃったって。でも、同じ言葉でも、イントネーションの強弱や振幅具合によって、真実の感情が表現されていると思います」

「いいよ、いいよ、君のせいじゃない」

まあ、色を塗ったと思えばいいか。ただ、これから探偵事業を継続するに当たって、まず、第一に、尾行が困る。右腕だけ、見えていたんじゃあ、頭隠して、尻隠さずじゃあないが、尾行していた相手に悟られてしまうし、それより、右腕だけ空中浮遊していたら、殺人事件じゃないかと思って、警察に通報されてしまう。

「飛ぶ右腕、中央商店街に現れる」の大見出しで、マスコミのけっこのえじきとなる。うーん、何の保証もないけれど、まあ、なんとかなるか。このお気楽さが、俺の欠点でもあり、長所でもある。ただ不思議なことに、物事は、全て、見方によっては、二通り以上の捉え方がある。

いい面もあり、悪い面もあり、どうでもいい、普通の面もある。主体は、屹然として存在しているのに、客体の考え方、見方一つで、栄枯盛衰の結果が待っている。俺は、主体だ、自らが存在するためには、相手を客観的に攻撃しなければ、こちらがやられてしまう。相手の攻撃を避けるためには、自らが透明となる必要がある。俺の右手よ、存在から、無存在へ戻っておいで。あの右腕が欲しい！

第三章 ある日の火曜日

昨日は、俺の体に劇的な変化が生じた。自宅に戻って、湯船に浸かりながら、三十数年間、見えなかった俺の腕をさする。これまでも、存在していたはずなのに、実際に見え出すと、愛おしさが増してくる。何回も、何回も、見えない左手で、露になった右手を慈しんで撫でる。おや、こんなところに、ほくろがある。右手の小指の付け根だ。右腕には、青い血管が浮き出ている。看護師さんは、注射しやすいので、ありがたがれるだろう。俺という未知の大陸を、これからも発見続けるのだ、なんて、楽しいことだ。ヘイ、ミスターコロンス！

俺は、体に異変が生じながらも、待っていてくれる客のために、仕事に取り組む。俺の個人的事情のために、客に迷惑をかけるわけにはいかない。今日の最初の客、今週二人目の客の依頼内容は何か。俺は、見える右手を掻きむしりながら、クミちゃんの作成してくれた調書に目を通す。俺の右手が、見えないながらも、かゆみがあったときは、掻きむしっていたが、形として、顕になったとたん、不思議なことに、より一層、かゆみが増したような気がする。かゆい、かゆい。今まで、隠れていたものが、お天と様の、白日の元にさらされ、注目を受けたために、恥ずかしさのために、かゆみが増したのか。プレッシャーとは恐ろしいものだ。俺は、自分の右手が、これまで以上に、愛しくなってきた。右手を描きむしりながら、また、一方で、磯惜しさのあまり擦りながら、調書を読み進める。

なにに、犬の捜索か。最近多いんだ、犬や猫などのペットの捜索が。人間を探さずに、ペットばかり探している。探されない人間は、フリーターやニート、果ては、四国遍路など流浪の身になる。それでも、自分探しだからと言って、全てが許される。自分は、自分を一所懸命探すのに、他人は、仲間の人間は放っておいて、他の生き物に生きがいを見出している。変な話だ。みんな、それ程、ペットに頼るほど寂しいのかな。

犬や猫がいなくなったって心配なら、巨大な自家製金庫でも購入して、鍵をかけて飼育すればいいじゃないか。犬や猫にばっかりに愛情をかけるから、犬や猫がその愛情に嫌気がさして、逃げちまうんだ。人間だって同じじゃないか。愛情をかければかけるほど、相手は愛情の押し付けに気がついて、逃れようとする。追いかける愛と避け続ける愛。すがりつく愛と振り払う愛。

なにに、相手に何も求めない愛情は美しいだって。冗談じゃない。将来何かしてもらおうという魂胆の愛情の方がいくらかましさ。お互い愛情の重さで、ビジネスライクに愛情のキャッチボールができるじゃないか。そのキャッチボールも、最初は、正面捕球だけど、時間が経てば、右や左に少しずつぶれて、時には、頭上高くか、グラブと反対方向に、大暴投となってくる。

例え、ボールがどこに投げられようと、まだ、キャッチボールの意思がある間は、愛情が一パーセントでも残っているということだ。そのうちに、相手が金属バットを持ち出してきて、せっかくの好返球も、公園の遥か彼方の空き地に打ち返されることとなる。相手の愛情は、既に冷め、攻撃的に、他者の排除を始める。それでも、すがりつきたい片方は、ひたすら、相手のこのころの真ん中に直球を投げ続ける。

やがて、打ち返すことに疲れた片方は、「やってられるか」と叫び声を発したかと思うと、バットとグローブを地面に叩きつけ、足早にグラウンドから立ち去る。公園の片隅のまで転がったボ

ールを拾い、駆け足で現場に戻った相手は、誰もいないことに気づき、ただただ、立ち尽くすのみ。相手が残してくれたバットとボールを心の支えにして、これからの人生を生きていかなくちやならない。

一方的な、見返りのない愛情なんて怖い。そこに打算がない分だけ、見えない鎖で相手を束縛してしまう。そして、相手が逆らおうとしたら、逆襲に触れてしまう。かけた分だけの愛情が、二倍にも三倍にもなって憎しみとなって返ってくる。

おっと、そんなことはどうでもいい。仕事だ。仕事だ。調書に、再び目を戻す。まずは、三日前の午後、ふと目を離した際に、玄関のドアから、犬が逃げ出したんだと。そこはマンションで、後を追いかけたが、あっという間にいなくなったのか。今まで、外で散歩したことはなく、それ以来、帰ってこないだと。ふーん、よっぽど、この犬、外の世界に憧れていたんだなあ。それ以来、泣きじゃくっていますだと。犬じゃなく、人間がか。やっぱり、わーん、わーんて泣くのかなあ。おっ、誰か来たぞ。この申し出者かな。

「先生、お客様です」

部屋に通されたクライアントは、顔は丸顔、色白で、ふっくらとしている。年齢は六十を過ぎているものの、目鼻立ちは整っている。今も、昔の面影がある。上品そうな服を身にまとい、左手の薬指には、大きな指輪が煌いている。たとえ、所有者の心が曇っていても、宝石は、いつまでも光輝く。その光に魅せられて、多くの人は、宝石を所有したがるのだろう。それは、永遠の命に結びつくのかも知れない。

彼女が何か商売をしていたのか、今もしているのかはわからないが、金銭的には、かなり成功している様子だ。ここ最近の客としては、上玉だ。うまくいけば、それなりの報酬が得られるかもしれない。期待と財布の中身が、相関関係になって欲しい。

「あの子を捜して。どこに行ったの、あの子は。本当に、誠心誠意、愛情をかけたのに、いつも裏切りばかり。裏切られても、裏切られても、可愛がってあげたのに、こんな形で仕打うちを受けるなんて。ひどい、ひどい、あまりにひどすぎる」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ。ここで、犬の悪口を言っても始まりませんよ。」

「誰が、犬なの。うちの子には、ちゃんと、名前があります。「ルビー」ちゃんと言うんです。今度、犬だなんて言ったら、私は承知しませんよ」

「これは、これは失礼しました。いや、まだ、犬のお名前を、いやいや、「ルビー」ちゃんのお名前を聞いていなかったものですから、つい、一般的な呼称を使ってしまいました。それで、その犬のルビーちゃんがどうしたんですか」

「よくぞ聞いてくれました。話せば長いお話です」

「短めにお願いします」

「あら、探偵さんって、冷たいのね。確かに、探偵さんは、映画や小説では、クールで、ニヒルで、寡黙なイメージですけど、心だけは熱くなって欲しいわ、でも、今から私がお話することを聞いたら、きっとお涙頂戴ものですわ。語りますよ、語りますよ」

「前置きは結構ですから、お話の続きをお願いします」

「こちらこそ、お願いします。もうあの子がいなくなって、何日も寝ていないんです。こんな私

をかわいそうだと思ったら、力を貸してください。もしかして、もう、あの子が死んでいるんじゃないかと思うこともあります。それでもいいんです。あの子のことさえ少しでもいいから分ければ。首輪とか、毛の一部とか、ごはんを食べた残りかすだとか、道路の片隅に追いやられた乾ききった糞のかけらでもいいです。電信柱に目印としてつけられたおしっこの臭いでもいいんです。何でもいいから、あの子に関係する物を探して欲しいんです」

「あなたが私に、何をしてもらいたいのか、よくわかりました。ですが、そのためにも、種類とか毛の色とか、尻尾が巻いているとか、もう少し、犬の特徴、いや、ルビーちゃんの特長を説明していただけますか。写真を見せていただければ、ありがたいのですが」

俺は、犬を繋いでいたはずの、もつれた縄をほどくように、事件の謎を解明しようとやさしくクライアントに話しかけた。

「そうですね。わかりました」

老婦人は、犬のことではなく、自らの生き立ちのことから話し始めた。

「私は、とある老舗の旅館の跡取り息子の主人と結婚しました。結婚してからは、旅館の女将として、妻として、母として、小学校のPTAの会長として、夫の両親が倒れたときは看護人としてなど、ひとりで何役をこなしながら、この老舗旅館を守ってきたのです。苦労もありましたが、一生懸命働いたお蔭で、経営も順調に伸び続け、旅館は増床し、従業員も増えました。一人息子も、結婚し、若女将もできたので、これを機会に、経営を息子夫婦にまかして、主人と私は引退したのです。ですが、人生とは皮肉なもので、やっとゆとりの時間が持てるかと思った矢先のある日、私を残して、主人は亡くなってしまったのです」

よくある話だが、よくあるだけに、妙に悲しくなってしまう。悲劇の主人公として生まれた透明人間の俺としては、特別の存在としての悲しみはより深いものがあるが、多数の中にある悲しみは、より広いものがある。どちらの悲しみも、哀しさには変わらない。こんなことを考え出したのも、俺が大人になった証拠だろうか。悲しみは誰の心の中にもある。どちらの悲しみがより悲劇だと比較しても、あまり意味がない。

「毎日、悲嘆にくれる私を見て、息子夫婦が、連れてきてくれたのが、子犬のルビーちゃんだったんです。最初は、犬なんか、あら、ごめんなさい。人に、呼び捨てにしないでと怒っておいて、自分から犬と呼ぶなんて、ごめんね、ルビーちゃん」

なんだ、なんだ、俺に謝るのかと思ったら、犬に謝るのか。この恨み、一ポイント追加。

「最初は、これまで、子供を育ててきたことや旅館の経営などで、今さら、食事やうんち、散歩の世話をするなんて、大変だと思っていましたけど、人間、慣れれば、ルビーちゃんの世話が楽しくなってきました。返って、何もしないでいることの方が、心配で仕方がなくなりますね。所謂、貧乏性ってやつでしょうか。あらら、話がそれてしまいましたね。それから、毎日のように、ルビーちゃんに、亡くなった夫や一人息子以上に、愛情をかけて育てたのですよ。探偵さん、わかります、この気持ち」

「ええ、わかりますよ。私も、昔、カメを飼っていたことがあるんですよ」

「あら、カメさんね、カメさんもいいわね。今度は、犬に変えて、カメでも飼おうかしら。カメなら、水槽の中から逃げ出すことはないでしょうから。探偵さんが、カメを飼っているというこ

とは、カメのように着実に一步ずつ、捜査を積み上げていくイメージがして、探偵事務所には、ピットしだわ。明日からでも、カメさんを、この事務所に連れてきなさいよ。きっと、クライアントたちも、カメさんを見て、あなたを信用すること間違いありません。ついでに、この探偵事務所の名前も、「カメ」探偵事務所に変更すれば、相乗効果が一層図れますよ」

俺は、カメほどにしか信用されていないのか。それに、探偵事務所の名前までも心配していただいて、有難方迷惑だ。どちらがクライアントかわからない。心の中では、そう思っても、相手はお客様、神様だ。金のなる木が目の前にぶらさがっている。競走馬で例えれば、目の前のにんじんだ。ここはひとつでも、ふたつでも、三、四がなくて五に我慢、六から一万まで、ひとつ飛びの忍耐あるのみ。

「ありがとうございます。さっそく、カメ印の探偵事務所、カメ印のバッジ、カメ印のTシャツ、カメ印のタオル、カメ印のお茶に、せんべい、それから・・・」

俺は、思いつく限りのカメ印のヒット予備軍の商品を口に出した。ひょっとしたら、どれかひとつぐらいは、本当に馬鹿売れするかもしれない。そんなことを期待することが間抜けなのか。アホらしくて、答える気にもならない。

そう言えば、子供の頃、最初に友だちに言った言葉が「バカ」だったような気がする。その次が、「アホ」、その次が、「マヌケ」、その次が、「お前の母さん、デベソ」、ナドナド、いずれも相手を誹謗・中傷する言葉だ。

今となっては、面前で他人を貶めるような言葉は使わないものの（事務所の壁に向かって、顧客の不満をぶつけることは、よくある。真実の壁が、いつ、俺のこれまでの悪口雑言をしゃべりだすのか不安だ）、子供の頃は、何の考えもなく、四つの言葉を「おはようございます」などのあいさつの言葉と同様に、日常生活の中で使ったものだ。その他にも、うんこ、しっこ、おならなど下品な言葉を、互いに楽しく会話の中に取り入れていた。うーん、懐かしい。思い出は、たくさんあればあるほど、心に重く押し掛かってくる。

「山中、お前本当に、うんこみみたいな性格の奴だな」

「杉本、おまえこそ、しっこの溜まり場みたい顔をしているじゃないか」と覚えたての知識をひけらかすのが楽しくてたまらないように、会話の一フレーズの中に取り入れたものだ。おっと、お仕事、お仕事。

「あら、そんなに気にしなくてもいいですよ。カメは所詮あなたのもの。ルビーちゃんは私のものですから。それより、ルビーちゃんのことですよ。あの子は、これまで私が全身全霊をかけて、愛情豊かに大きく育ててきたのに、隙があれば、すぐに私から逃げようとしたのです」

「例えば、自宅からですか」

「そうです、自宅でもそうです。普段は、家の中に住んでいて、散歩や日光浴、夏の間の水浴びの時は、庭に出してやります。その時の、喜びようといったら、例えようがないほどです。それなのに、ある日、偶然にも、裏の勝手口が開いていて、そこから逃げ出したんです。なんで、勝手口の鍵を掛けるのを忘れてしまったんでしょう。ルビーちゃんが逃げ出したことよりも、私は、そのことの方が許せないのです。用もないのに、きっとどこかのりんご売りかがやってきて、「りんご一、りんご一」と叫びながら、私の家の勝手口を勝手にあけて、かつてないような声で

、りんごを買って、買ってと叫んだのに違いありません。その時、私は、ルビーちゃんを病院に連れて行っていったために、りんご売りがやってきて、扉を開けっ放しでいたなんて気がつかなかったのです。扉の鍵を確認しなかった私も私ですが、りんご売りもりんご売りです。「開けたら、閉める」自分がしたことに対して責任を持ってもらいたいです。今の社会に必要なのは、他人を思いやる気持ち、もし、自分が、相手の立場だったらどうなるのか、どうするのか、メタの立場、つまり、シンボルタワーやシンボルの存在の高く、屋島から、景色を眺めるように、俯瞰的立場から、物事を見つめ、自らの行動の規範にすることが必要だと思いませんか」

「それは、おっしゃるとおりです」

相手が、六十過ぎのばあさん、いや淑女だと思い油断をしていた。探偵の立場でもそうだ。あまりにも当事者にのめり込んでしまうと物事が見えなくなってしまうことがよくある、物が見えるということと、物事がわかるということは、全く別のことなのだ。

両まぶたをおでこからあごまでくつつくぐらい開いて、よく見やがれ。耳たぶを空が飛べるくらい広げて、よく聞きやがれ。鼻の穴を自分の周りが真空になるぐらいふくらまして、臭いを嗅いでみやがれ。瀬戸内海の海の水をすべて飲み干すぐらい口を開けて、よく味わってみやがれと言いたくなることがある。人は、目の玉を二つ与えられたものの、真実の一つであることに気がついていない。いや、そうじゃない。事実がひとつであり、真実は解釈の仕方により、いくらでも都合のよい方向に導くことができる。

「その考えは、正しいと思いますが、残念ながら、私はスーパーマンじゃありませんので空を飛ぶことができません。空高くから、ルビーちゃんを探せばいいのですが」

俺は、真っ正直な回答をした。

「何もあなたに、正義のヒーローになってくださいと言っているわけじゃありません。ただ、私にとっての宝物、ルビーを探して欲しいのです」

「それで、りんご売りに逃がされたルビーちゃんは、どうなったのですか」

「さっきから言っているように、りんご売りが犯人だとは断定していません。ひょっとしたら、みかん売りかもしれませぬし、バナナのたたき売りかもしれませぬ。私にとっては、スイカ売りでも、ぶどう売りでも、そんなことはどうでもいいのです。果物屋さんを経営したいわけではありません。商売なんてもう懲り懲りです。うんざりです。と、言いながらも、朝、誰かに出食わすと、「今日はいい天気ですね。お体の調子はいかがですか」なんて、つい笑顔で対応してしまいます。そんな自分に、いじらしさと可愛らしさを感じる今日この頃です。私は、ルビーに自分自身の姿を見ているのかもしれない」

彼女は、既に六十を過ぎているが、話す仕草ひとつひとつに、そこはかたない色気を感じる。人は、見た目の年齢ではなく、心の持ちようなのか。ルビーのことを話す時、人生に疲れ果てた皺の一本一本が、満面の喜びの間に変わっている。笑顔で出来た皺は、必ず、平面に戻るのだ。

俺は、再び、問いかける。

「もう一度お尋ねいたします。自宅から逃げ出したルビーは、まだ、戻って来ないのですか」

「はい、お蔭で、わたしの心に輝きが戻りました。それから、二、三日経過した頃、ひよんなことから、ルビーが戻ってきたのです。もちろん、まっ白な雪から、白さだけを抽出したはずの

毛は、死の灰に匹敵するほど降り続く排気ガスや、出来るだけ人目に触れ、購買力を高めようと計算されたかのように、無造作に捨てられたタバコの吸殻、遠心力で地球から飛びだすのを防ぐため、靴と合体がしやすいように捨てられたチューインガムなど、地球上のありとあらゆる廃棄物が集められたかのように、黒灰色に汚れていました。しかし、赤くきらめく目の輝きだけは、ルビーそのものでした。今日が、地球最後の日だとしても、明日の天気を願う、生命力に溢れた目でした。私は、自分の服が汚れるのも気にせず、思い切り、ルビーの体を抱きしめると、顔一面に、キスの嵐を見舞ったのです。ルビーはいやがりもせず、ただただ、じっとして、私のなすがままに身を委ねていました。ひょっとしたら、あの時から、ルビーは今日の家出のことを計画していたのかもしれませんが。二、三日のひとり旅の結果、自分ひとりで生きられるという自身を得たのかもしれませんが。これが、これまでの一週間以上の旅たちの始まりかも知れません。今となっては、何もかもが決まっていたのに、私、一人が知らされていなかったという気持ちです。夫を亡くして、一人の孤独の寂しさを知っていましたが、信頼していたルビーから見放されたと思うと、地獄へ突き落とされた気分です。もう一度、一人の世界へ戻ったほうがいいのかも知れませんね。ルビーの最初の冒険の後以降、私は、二四時間、片時も目を離さず、ルビーを見張り続けてきました。でも、一秒たりとも目を放さなかったわけではないですよ。私も人間。ルビーも人間、いや、人間同様の犬。ある程度、信頼関係がないと、共に生活なんてできません。わたしは、ルビーをただ、単に不幸な目にはあわせなくなっただけなのです、ゴク」

永遠に続く一人芝居に、相槌を打つ暇もなく、ただ黙って聞いていた。やっと、相手が唾を飲み込む瞬間を見逃さず、二人の会話へと発展させるべく、合いの手を入れる。

「そうですか。それで、一度あなたの元へ帰ってきたルビーが、どうしていなくなったのですか」

確かに、話を聞くだけでも一時間が過ぎようとしている。基本料金は、三十分単位だ。元旅館の経営者だし、身なりもしっかりとしているから、お金の心配はないものの、いつまでもだらだらと犬の世間話をしているわけにはいかない。

俺は、探偵だ。しかも、透明人間という、ただの探偵ではない。誰にも見つからずに、秘密の場所に侵入して、国家情報入手することも可能だ。もし、ルビーという犬が、誰かの手に隠されていて、そこのアジトにこの俺が侵入し、無事に、犬を奪還するというのなら、透明人間の特性を思う存分生かすことができる。

しかし、どこに行ったかわからない犬ごときを、わざわざ、特殊能力戦士である透明人間の俺が探す必要があるのか。おっと、これは秘密のアツ子ちゃんだ。疑問は続くものの、お客様は神様だ。俺は、透明人間だ。もう少し、話を聞こう。できれば、手短かに。じっとしているのは、俺の性分に合わない。

「実は、私は、高知に住んでおり、月に一度、この高松の犬の美容室に、ルビーちゃんをシャンプーに連れてきているのです。」

「お客様は、高知からきたのですか？」

俺は、あきれてものが言えなかった。しかし、急いで、質問した。今度は、俺からの攻勢だ。「高知と言えば、ここ高松から百四十キロ、車で2時間はかかると思うのですが、わざわざ、

いや、ありがたいことに、犬の、いやルビーちゃんのシャンプーに訪れているのですか。高知にも、犬の美容室はあるでしょう」

思わず、声を荒げてしまった。お金持ちの奥様が、道楽で、犬のシャンプーのために、飛行機に乗って東京へ行こうが、船で世界一周しようが、そんなこと、こちらの知ったことではないものの、あまりにも自分とかけ離れた生活に、嫉妬したのかもしれない。もちろん、人は、嫉妬から、自分もそうなりたいと次なる行動のきっかけを得る。上昇志向の典型的な誘発法だ。その点からすれば、嫉妬もまんざら悪いことではない。人の行動を促進する、きつけ薬なのだ。

だが、行動を伴っても、相手の足を引っ張る嫉妬心はよくない。マイナス思考の最たるものだ。もぐらたたきじゃあるまいし、人が目立って何が悪い。俺も、目立ちたいが、透明の探偵じゃあ、誰も気づいてくれない。再度、心を落ちつける。高知で、ルビーちゃんがいなくなったら、わざわざ私のところくるはずがない。高松まで、来てくれたから、私の所へ来てくれたのだ。ありがた、ありがた。ちょっと迷惑。

「それで、どうなったのですか」

「ええ、探偵さんのおっしゃるとおり、高知にも犬の美容室は多くありますが、こちらの犬の美容師さんが、カリスマ美容師さんで、犬の美容師会では、有名な方なのです。以前は、高知で店を営業していたのですが、こちらの高松の方にも店を出されて、現場の指導者として、第一線で活躍されているのです。うちのルビーちゃんは、カリスマ美容師さんに良く慣れていて、逃げることもなく、シャンプー・カットの時も大人しくしていたのです。また、違う美容室に行ったら、ルビーちゃんが怯えて、逃げ出しては大変だと思い、こうして高松までやってきているのです」

犬が、高知で逃げ出しても、高知内でとどまるだろう。まさか、高松までは来やしない。しかし、高松で逃げたら、ほっといても、百五十キロの逃避行となる。犬の主人は、そここのところを考えていたのだろうか。まあ、犬の美容師の追っかけということだ。しかも、犬のために。それほどまでに、ルビーのことを愛しているのに、ルビーの方は、なんてことだ。親のこころ、犬知らず。これが本当の犬畜生だ。人も、いつだって畜生になれる。いや、普段から畜生なのかもしれない。俺が、透明人間であるように。

「でも、それがどうしていなくなったのですか」

「そう、すべて、あの子が悪いのです。そして、私が悪いのです。いつものように、ルビーちゃんを犬の美容室「チャンドラー」に連れて行きました。カリスマ美容師の正樹君にお願いしたのです。ルビーちゃんは、正樹君を見ると自分から喜んで、クイーン、クイーンとおねだりしながら、正樹君の胸に飛び込んでいきました。言っときますけど、ルビーちゃんは、男の子です。どうして、キング、キングと泣かないんでしょう。今日の餌も、明日の餌も保障されていない野良犬に比べれば、王侯貴族の暮らしと言っても、言い過ぎではないでしょう。まあ、それは置いておいて。私は、ルビーちゃんが喜ぶ姿を見て、二時間あまりかけてやって来たかいが、報われほっとしました。正樹君は、ルビーちゃんを抱きかかえると、「お預かりします」と言い残し、店の奥のユニットバスの方へ連れていきました。私は、ルビーちゃんに向かって、「頑張っ

時間を過ごしました。小一時間が過ぎた頃でしょうか。私は、高知からの運転の疲れもあり、少
しうとうとと眠りについていました。「長い間お待たせしました。お疲れさまでした」の目覚ま
し時計代わりに声が聞こえてきました。薄目の向こうから、やや輪郭のぼけたルビーちゃんが、
正樹君に抱きかかえられ、私の元に戻ってきました。やっと、頭がはっきりとしたわたしは、「
ありがとうございました」と礼を述べ、ルビーちゃんを受け取り、再び、連れて還ろうとしま
した。美容室の入り口の扉が開き、他のお客さんが、入ってこようとした時です。ルビーちゃ
んは、天国の扉が開かれたと思ったのでしょうか、わんと一言吠え、私の腕からする抜けて、外
へと逃げて行ってしまったのです。いいえ、逃げたのではなく、自分の道を歩み始めたのかもし
れません」

と言うなり、老淑女は、顔を伏せ、嗚咽を漏らし始めた。

女性の涙には弱い俺は、しらじらしくも慰めの言葉をかける。

「心配なさらなくても、結構です。私が、なんとか、世界に誇る多島美の瀬戸内海のように、あ
なたにとって大切な宝のルビーちゃんを、きっと連れ戻してみせますよ」

愛想笑いを誤魔化すため、より一層、声をあげて、大きく笑った。例え、見つけ出す可能性が
ゼロに近いとしても。

「探偵さん、力強い言葉、ありがとうございます。もし、ルビーちゃんが見つからなくても私は
かまいません。私はただ、ルビーへの想いを誰かに告げたかったのです。もう犬はなんて飼いま
せん。主人が死んで以来、ルビーちゃんだけを生きがいとし、これだけ愛情を注いでも、注い
でも、飼い主である私の言うことを聞かないで、ただ、逃げるのみ。でも、車に轢かれて死んだ
のか、それとも、どこかで生きているのかだけでも知りたいのです。何かありましたら連絡くだ
さい。例え、何の手がかりがなくても、連絡をいただければ、また、挨拶に参ります。本当に、
お願いばかりで申し訳がありません。どうかよろしくお願いします」

俺は、それから、二時間あまり、淑女とお話をした。犬の、好きな食べ物、好きな音楽、好き
なテレビ番組、好きなシャンプーの香、好きなベッド、好きな、好きな、あれこれを。また、嫌
いな、それ、どれを。俺は、話を聞き続けて、その犬が好きでなくなった。いや、正確には、そ
の犬の飼い主のことが。こんな風にして、他の同業者達も毎日、毎日過ごしているのかと思うと
悲しくなる。だが、それは、それとして、仕事は仕事。老婦人から借りた写真を手がかりに、ダ
イヤモンドちゃん、いやルビーちゃんを探しに出かけることにした。

「ちょっと、搜索に出かけるよ」

普通の人間に見えるよう、普通の姿が見えるよう、背広をひっかけ、城から戦場へと向かった
。

とりあえず出向いたのが、犬の美容室。犯人は、必ず、現場に立ち戻る。現場に足を運ばずと
して何の搜索だ。探偵業のベストラー「探偵五輪書」の前文にも、記載されている。しかしな
がら、昨今、この前文を変えようとする勢力が台頭してきている。現場主義からインターネット
等による情報収集を優先する流れである。

確かに、インターネット等による情報収集は便利である。過去の事例を探り、今回の事件と似

たような事件を集め、そこから解決の糸口や方向性を決めて、捜査に取り掛かる方法である。日々、時間に追われる現代人にとって、極めて効率的で能率のよいやり方であろうが、そこには深い落とし穴がある。過去の事例に囚われて、新しい発想が生まれなくなることだ。想定外の問題に突き当たると、思考停止状態となり、慌てふためき、パニックに陥ってしまう。

そうならないためにも、様々な経験をつみ、例外こそ、正道であることを体で自覚することが大切だ。俺は、断固として、五輪書前文の改正を求めない。崇高な理想があつてこそ、人は人として生きていける。全てが、現実主義なら、水が低きに流れるがごとく、地獄への道に真逆さまに落ちてしまう。理想主義を非難するものは、ひと時の自らの快樂に溺れてしまうが、未来の夢のある子どもたちには、何ら責任をとらない。銃を持つなら、まずは自らが屍となれ。

なんだか、興奮してきたぞ。ただ、言えることは、人は、理想に生き、現実によって死に至るということだ。何んだって、そのことと、ルビー探しと何の関係があるかだ。何の関係もないが、透明人間の俺が、探偵として生きていくための矜持が五輪書なのだ。それを、一時期のはやりかなんかで変えられてたまるかだ。まずは、自らが経験し、事実じゃなく、真実は何かを突き止めなければならない。

まあ、難しいことはおいておこう。さあ、本来なら、従業員に当たって、聞き込み調査をすべきなのだろうが、既に、老婦人が訪れ、犬、ルビーが帰ってきていないことを確認している。今さら、新たな情報はないだろう。それに、もし、犬の美容室が、ルビー失踪事件に関与しているのなら、例え、聞き込みをしたところで、本当のことはしゃべらない。いたずらに、こちらの存在を、相手に知らしめるだけで、何のメリットもなく、返って、不利になるだけだ。

ひょっとして、一宿一飯の礼ではないが、シャンプーのお礼に、再び、犬の美容室に戻って来ることもある。探偵五輪書第一条、まずは、張り込めだ。俺は、店の前に車を駐車し、何か情報が得られるまで待つことにした。季節は、秋。夏の暑さも峠を越え、体には絶対適温の時期となった。しかし、車の中に太陽光線が差し込むと、真夏を思わせるような、気温となる。汗腺が百二十パーセント開放状態となるが、透明人間にとって、汗は最大の敵である。

空気中に、いきなり水玉が浮かび上がれば、誰だって驚く。ひょっとしたら、理科の実験か何かで、雨は何故ふるのかを実験しているのかと勝手に思い込んでくれるかもしれない。誰も乗っていないと思える車への、熱い視線に注意を払う必要がある。見張っているつもりが、こちらが見張られていることになるかも知れない。探偵免状の返還だ。

数時間待たせようか。車の中は、俺の汗で、霞から霧、そして、雲の状態へと変化している。このまま、あと一時間も経てば、雷が鳴り、大雨が振り出しそうだ。恋人同士が、夜、港でデート中、誤って、岸壁から海に転落して、車に閉じ込められたまま、命を落とすニュースを聞くことあるが、路上駐車中の車の中で、男が水死体で見つかったなんて洒落にもならない。

いや、俺は、透明人間だから、「車中から、洪水。乗っていたはずの人間は行方不明。背広だけがみつかる」なんて、新聞記事が頭に浮かぶ。衣服だけ脱がされて、俺の体と俺の愛車だけがそのまま廃棄処分。もともと、死んでから墓なんて作ってもらいたいとも思わないが、腐敗したまま、カラスやうじに食い尽くされてしまうのも、天国から自分を眺めると惨めな気持ちになる。死んだ後、煮るなり、焼くなり、茹でるなりしてくれてもいいが、形だけは残さないで欲しい

。 おっ、犬の美容室から誰かが出てきたぞ。何だ、ゴミ出しか。ふと、携帯電話で時間を確認する。時間は、もう、午後五時に三十分前だ。勤務時間終了。俺のおなかは、空腹感からか、鼓笛隊が鳴り出した。二人しかいない会社だから、どちらか一人は、事務所に残っていないと、お客や警察等からの連絡があったときに、直ぐ対応ができない。

留守番電話や携帯電話での転送という方法もあるが、通常の間は、やはり、生の声で対応したほうが、相手も安心し、信頼できる。「あの、探偵事務所って、いつ、連絡してもいないのよ」なんて噂が立ち始めたら、看板に傷がつく。

それよりも、俺を待っていてくれるクミちゃんの元に、早く帰る必要がある。確か、彼女の予定では、月曜日は、近くのフィットネスクラブで、エアロビクス教室、火曜日が、ピアノの練習。なんと、自宅に、先生が来てくれるそうだ。年に一度は、三百人ほどの会場を借り切って、発表会があるそうだ。確か、来月の十五日の日曜日の午前中と聞いている。先生も、是非、聴きに来てくださいと無料チケットを手渡された。

ただし、この無料チケットというのが曲者だ。一回コンサートを開くにしても、会場やの使用料や音響、照明、空調使用料、プログラムやチケットの印刷代、先生へのお礼の花束など、様々な経費が掛かるはずだ。小さいながらも、一国一城の主の俺さまだ。たった一人の従業員の晴れの舞台に、出席はもちろん、花束の準備もしている。残念ながら、何の収穫もないけれど、彼女のためにも、早く帰ろう。

俺は、アクセルを吹かし、急いで、事務所に戻ろうとする。あと残された時間は、三十分。捜索犬との持久戦はお預けで、今度は、時間との戦いだ。毎日、同じように時間が過ぎていく。感動のない人生はつまらない。ならば、自分から無理やりにでも、充実感・達成感を味わうために、後三十分間で、事務所に帰れるかどうか賭けをしてみる。賽は、どちらに振られるのか。

だが、ふと俺は思い出した。保健所だ。不明犬や野犬などが、保健所で保護されたり、捕獲されたりしている。このまま、何の手掛かりもなく事務所に戻るのも癪だ。クライアントにも申し訳ないし、探偵の俺自身も、納得がいかない。もし、終業時間に遅れたら、クミちゃんには、悪いが、引き続き、一人のワンちゃん捜索隊へ参加だ。隊長兼隊員、監督兼選手、社長兼社員など、一人何役もこなす。その点、意思決定の早さが売りだ。その決定した内容が、正しいかどうかはおいておいてだが。

どちらにせよ、結果は、後から、自分自身に降りかかってくる。時には、結末の恐ろしさから、判断すること、動くことをやめてしまいたいこともあるが、それは俺の生き方に反する。透明人間である以上、どんな境遇にも立ち向かっていかなければならない。時には、相手が、不幸が、勝手にすり抜けたり、遠ざかってくれたりすることもある。結局、意識しすぎているのは、こちら側だけの問題なのか。自意識過剰の唐変木だ。持ち前の猪突猛進の精神で、何らかの手がかりを探しに、保健所へ向かう。

住宅街の中に、聳え立つ、六階建ての建物。お犬様にとって、そこは、自らを救出してくれる天国なのか、はてまた、この世から、存在を消し去る、地獄なのかはわからない。門は叩かなければ開かれない。

自動ドアが開き、俺は、事務所の受付のところまで足を進める。窓を多くとり、開放感のあるロビーには、狂犬病予防注射のポスターと動物愛護のポスターが隣り合わせに並んでいる。

俺はおもむろに、カウンターに向かう。

「すみません。犬がいなくなったので、探しているのですが」

近くの職員に声を掛ける。

俺の声が大きくて、事務所中に、響き渡ったのか、奥の方から、担当と思われる職員が、ノートを持って、俺のほうに近づいてきた。

「犬を、お探しですか。犬の種類や特徴、いつごろいなくなったのか教えていただけませんか？」

俺は、飼い主から教えられたとおりのことを伝える。

職員は、俺の言った犬の特徴をメモに書きつけ、台帳のページを繰っている。この秘密のノートに、犬の情報が全て隠されている。俺は、独自の嗅覚を利用して、身を乗り出し、相手の書類を奪わんかばかりに、覗き込む。

「えーと、犬のことで何か、分かりましたか」としらじらしい質問。

保健所の職員は、俺の動作に即座に反応し、ノートを持ったまま、後ろに一步下がる。相手は下がれば、こちらは前へ進むしかない。更に、カウンター越しに、身を乗り出す。相手は、今度は、ノートをパタンと閉じると、

「残念ながら、お客様が探されている犬は、現在のところ、保健所では保護されていません。また、市民の方で、同様の犬を預かっているという連絡もはいていません。お客様のお名前、住所、連絡先等を教えていただければ、お客様が探されている犬が見つかったとき、ご連絡いたします」

保健所の職員が言っていることが本当かどうかはわからないが、そこで疑っても仕方がない。まして、俺に、犬の一匹のことで、嘘の情報を与えても、相手にはなんのメリットもないはずだ。タイムリミットの五時まで、残り十五分。時間もないこともあり、俺は、相手の言葉に素直に頷き、名詞を渡し、犬のことで、何かわかることがあれば、連絡をしてくれるよう依頼する。

保健所を後にして、車に乗り込み、猛ダッシュで、事務所に向かう。事務所には、俺が探し求めている、彼女が待っているからだ。この時だけは、犬のことは、頭の片隅からも、消えている。残り、五分。車を、駐車場に止め、昔、マラソンで鍛えたはずの、健脚で、二段飛ばしで階段を上る。激しい動きのため、息は切れ、口から、真夏の炎天下の犬のように、口から舌を出し、呼吸を助ける。

おっと、やはり、こんなときでも、犬のことは忘れられない。俺は本当に、仕事熱心だ、自分で自分に感心する。階段の踊り場で、一息つかったお陰で、三階の俺の事務所に扉が見え出した。時計を見る。午後五時まで、後、三十秒。よかった、間に合った。俺は、見える右手で、ドアを開けた。

「先生、お帰りなさい。お疲れさまでした」

クミちゃんからのやさしい言葉を受ける。風を切って走ったため、体温が急激に下がったも

のの、心の中は、温かくなる。やはり、人間は、言葉、言葉、言葉だ。

「先生、入れたてのお茶はどうですか。冷え切った体を温めてください」

駄目押しの言葉で、体の芯まで温かくなる。

「秋とはいえ、朝夕は冷え込みが厳しくなりましたね。少し、肌寒いので、暖房をいれておきました」

もう、こうなると唸るしかない。体は、透明でも、心は、人のやさしさや思いやりがちゃんと、突き抜けることなく、染み渡るのだ。このひと時のために、俺は、生きているのかもしれない。永続する肉体と、瞬間の感動。感動の連鎖の中で、人は自らの歴史を紡いでいく。

ただ、単に、俺は生きているのでは、ない。こころの旅を経験しているのだ。妙に感慨に耽ってしまった。お茶の湯気を見て、砂漠の蜃気楼の中を一步、一步、歩んでいる気になったのだろうか？一步、百景。百の人生。偶然の産物の中で、人生の軌跡が出来ていく。夢見る、透明人間に明日はあるのか。

いや、明日を見たいために、明日への準備の言葉を発する。

「やあ、遅くなって、ごめん。もう五時を過ぎたから、帰ってもいいよ。今日は、ピアノの練習だね。早く、帰って、準備をしなくちゃ。また、明日も、よろしく」

「はい、お気遣いしていただき、ありがとうございます。先生の机の上に、お茶をいれています。それでは、失礼します」

クミちゃんの労いの言葉に、疲れもふっとぶものの、誰もいなくなった事務所に、ぽつねんと一人いると、よけいにどっと疲れが増す。今日の犬搜索の成果？を、調書に書き込んだら、早々と、退社しよう。初めて、人目にさらされた俺の右手も疲れているはずだ。犬おばさんには、明日の朝、一番で報告だ。

第四章 ある日の水曜日

朝一番で、仕事場に到着する。犬の美容室でのこと、保健所でのことを手短かに、犬おばさんに連絡する。

「今すぐには、見つからないかもしれませんが、私の方でも何らかの手を打ってみます」と言ってみたものの、大海原の中で、メダカー匹を探すようなもの、とても期待はできない。まして、淡水魚のメダカなら、大海原に泳ぎ出す前に、世間の厳しさに打ちひしがれ、命を落としているかもしれない。それでも、探偵仲間に依頼して、特徴がよく似た犬がいた連絡してもらおう、頼もう。二つの目よりも、四つの目、四つの目よりも八つの目だ。探偵家業は、プライベートな秘密を探るため、個人主義で動くことが多いが、人や物探しなどは、互いにネットワークを利用したほうが、効率はやい。もちろん、お礼は、必要だが、結果的には、経費は安くつく。さあ、誰に依頼しようかと頭の中で、考えていたら、雇い主からの電話が掛かる。

「ありがとうございます。早速、動いていただいて。でも、もういいですよ。あの子は、私の元がいやで、逃げ出したんです。それを無理やり連れ戻したところで、また、同じことが起こることです。ただ、私も、あの子との関係を断つことを、自分自身に納得させるために、探偵さんに、お話を聞いてもらったのです。とにかく、ありがとうございました。調査料は、指定の銀行に振り込まさせていただきます」

という、老婦人は、電話を切ってしまった。

ルビーちゃんを探すという俺の強い気持ちも、凧の糸が切れたように、どこか遠くへ飛んでいってしまった。こんな一方的な終わり方があるのだろうか。俺としては、彼女から話を聞き、ほんのちょこっとだけ、ルビーを捜索しただけだ。確かに、俺たちの仕事は、机に椅子、そして、電話とメモ帳があれば、十分だ。俺の活動時間を、相手に切り売りして生活しているといっても過言ではない。だけど、それなりの成果がないまま、相手からお金をもらっても、納得しがたいものがある。

俺もこの仕事への誇りと情熱がある。客の喜んでもらえる顔があるからこそ、二十四時間、三百六十五日も厭わず、汚い、厳しい、きつい、張り込みや聞き込みができるのだ。犬おばさんからの申し出はありがたいものの、返ってそれが俺の心を駄目にしてしまう。不思議なことだ。俺は、もっと相手の笑顔が見たいのだ。スマイル、スマイル、スマイル。それが、透明人間である俺の存在価値なのだ。あなたの笑顔に魅せられて、俺は生きている。

「先生、今日の予定です」

クミちゃんの声に、俺の心は、現実とのふれあいの場に、再び、舞い戻った。

今日、一番目の客は誰だろうか。先ほどの、心の葛藤は、どこか部屋の片隅か、ゴミ箱の中か、窓を開けて、年中、日陰の、すえた臭いのする路地にでも投げ捨てればよい。犬愛犬家の彼女も、それなりに満足してくれたのだろう。俺は、次の新たな問題と遭遇し、解決の糸口を見つけ、顧客の笑顔に会わなければならない。もちろん、次々と、問題が解決すればよいが、ほとんどは、最後の結末を見ずに終わるのが、俺たち探偵業の仕事だ。調査等を行うが、最終的に、

右か左か、三叉路、四つ角の道のどれを選択するのは、それぞれの顧客の決断による。俺たち探偵は、その判断するために、材料を提供するのに過ぎない。

例え、愛犬が見つかったとしても、その愛犬を、これまでどおり、慈しんで、家族、いや、家族以上に思い、共に生活するのか、探し物がみつかったとたん、これまでの愛着が薄れ、橋の下や、山野に、捨てに行くかもしれない。俺たちの仕事は、お客に、一時的に、喜んでもらえたとしても、その幸せを、永久に、永続的に、与え続けたり、維持できるものではない。積み上げたバベルの塔の幸せの石積が、一瞬で、壊されたりすることもある。そして、再び、その石を積み上げる。この、繰り返しの毎日だ。もちろん、空高く希望が適うのがいいことか、昨日よりも、一歩前へ進むのが、素晴らしいことなのかは、わからない、人生が、地球のような球状であれば、いつかは、スタートラインに戻ってくる。そんな、答えの見つからない、とりとめもないことを考えていたときだ。地殻変動のように、俺の体の中心部から、マグマが噴き出すかのように、激しい痛みが襲ってきた。

おおおおお、これはまた、さっきの痛みと同じだ。今度は、右足が、急激に、痛む。見える右手と見えない左手で、見えない右足を抱える。おっ、これは早口言葉にするのに、最適なフレーズだ。もう一度、繰り返そう。見える右手と見えない左手で、見えない右足を抱える。よし、詰まることなく、すらすらとしゃべれたぞ。

早口言葉なんて、どうでもいい。それよりも大事なものは、激痛が走る、俺の右足だ。これは。もしかしてと思った瞬間、くっきりと右足が見えだした。足首からふくらはぎ、ひざ、そして大腿部と。完全に見えきった時、俺は、半分透明人間になった。腹部はまだみえてないものの、右手、右足が見えれば、十分、右半身といえよう。右半身透明人間か。俺の売り文句がまた変わる。

俺の、喜びと悲しみが混合した叫び声を聞いて、秘書のクミちゃんが部屋に飛び込んできた。「先生、大きな声を出して、どうかなさったのですか。あれ、先生の右足が……。右手だけが見えていては寂しいので、色でも塗ったのですか？結構、リアルですね」

相変わらずの、クミちゃんの素っ頓狂な返答に、面くらい、とまどう、左半身透明人間の俺。興奮のため、少し、あの一、その一、この一と、少し上ずりながらも、クミちゃんに、事情を説明する。

「先生が人のためになることをされたので、きっと、神様がプレゼントをくださったんですよ」クミちゃんは、脳天気な発想は、しばしば、俺を慰めてくれる。プレゼントか、ありがたいことだ。子どもの頃、毎年、十二月二四日の晩、「なむだいし、へんじょうこんごう」と唱えながら、二礼二拍手一礼をしてふとんの中に潜り込み、サンタクロースが、寒い国から大空を駆け抜けて、ただ自分のためだけにプレゼントを持ってくるのを待ったものだ。あの頃の、自分は、体も心も透明だった。

どうせプレゼントをくれるのならば、三億円の宝くじが当選するとか、事務所に百万円が投げ込まれたりするとか、スーパーのチラシに、卵ひとパック、十円とか、現実に、得するものがある。いや、現実に、俺の手は見え出した。見え出したけれど、それは、もともとあったもの。あったものが見え出す。これは、確かに発明ではないが、発見だ。俺が、見えている、感じてい

る世界なんて、所詮、わずかなもの。漂うような生活の中で、様々な世界と触れ合っているが、実際に、すべての情報を入手しているのではない。自分に必要なもの、いや、本当に必要かどうかは、俺の五感、六感がすぐさま判断しているわけではない。たまたま、ほんの偶然で、強調された、刺激が飛び込んできて、慌てふためいているだけではないだろうか。現実を、自分の都合のいいように、解釈して、悦にいつているだけではないか。

とにかく、俺の右足は、俺以外の他人にとって、現実のものとなった。なんと、喜ばしいことだ。とりあえず、他人からは、視覚という点においては、認識される、最初のスタートラインに立つことができたわけだ。神様、仏様、サンタクロース様の幸せのおすそ分けに、感謝すべきだろう。この感激を、誰に分かちあげるべきなのか。やはり、俺の身近にいる、秘書であり、受付であり、これまで、唯一、俺の存在を、視覚を除いた、四感で認識してくれたクミちゃんだろう。この成功報酬で得たお金で、彼女に、ボーナスを与えよう。

待てよ、それほどの、金額はもらえない。そうすると、どこか、美味しいフランス料理店、いや、イタリア料理店、中華料理もいい。いやはや、日本人である以上、和食を突き詰めなければならない。素材のよさを褒め称えること、つまり、優れたスタッフに感謝することが大切なことなのだ。それこそが、和食であり、日本人式経営の極みなのだ。早速、チャルメラが鳴り響く屋台のラーメンか、演歌の歌手なら一度は歌ったかどうかは知らないけれど、妙に、間延びした石焼きいものPRのこぶしとか、チンカラ、ハンカラの音に合わせ、何処からともなく現れる、ロバのパン屋の三択の中から、どれかひとつを選んでもらおう。いつ、それを切り出すかが問題だ。

こう見えても、いや、他人からは見えないのだが、少し内気な、少年二十八号である私は、何も言えず、態度で示してもわかってもらえず、ただ、ただ、おろおろとするだけである。

「先生、すいません、電話です」

クミちゃんが、俺の部屋に飛び込んできた。

かなり動揺している。俺が、おろおろしている間にも、世間は、着実に進んでいるのだ。気持ちをしっかりと持ち、目の前の問題に、対処しなければならない。通常なら、電話等での用件は、秘書のクミちゃんが受けてくれて、直接、俺が出ることはない。それにも関わらず、クミちゃんが、俺に電話を回してきたのだ。よっぽどの事なのだろう。

「変なんです。電話の相手が」

変な相手なら、これまでも何人にも会ったはずだ。今週だって、主人探しのおばあちゃんだって、犬探しのおばさんだって、十分に変だった。もちろん、話を聞く、探偵家業の俺だって、一部透明人間、いや左半身透明人間だ。変という小指を立てれば、偏よったものばかりが集まってくる。

一見、普通と思われるクミちゃんだって、透明人間が経営している事務所の事務員だ。普通の神経では、勤められないだろう。この世は、七変八化で、繋がっているのか。それを呼び寄せているのが、この俺かもしれない。そうすると、この世で一番変なのが、この俺か。変なこの俺に、変な相手の相談をする、クミちゃんも変だ。

「電話の向こうで、臭うんです、臭うんですの言葉ばかりなのです。ほら、あなたも臭うでしょう。もし、臭わないなんて、変ですよと、一方的に、しゃべりつづけるんです。「すみません、この電話では、臭いが受け取る機能が付いていないんです」と皮肉を込めて答えると、「あら、探偵屋さんにしては、ずいぶん、遅れているんですね、もっと設備投資しないと、時代についていませんよ」と返ってくる始末。私も、あんまり腹が立って、「それじゃあ、お客様の電話は、臭いを感じる機能がついているんですか」と嫌味を言えば、「勿論ついていますよ、でも、お宅の方が、臭いを受信できる装置が備わっていないんだったら、十分な能力が、発揮できませんね」だって。ああ言えば、こう言うとは、まさに、このことですね。そして、拳句の果てが、責任者、出て来いですから。ほんとうに、やってられませんよ」

クミちゃんは、よっぽど腹が立ったのか、肩から息をしながら、事件を再現してくれる。

俺は、無理やり作った笑顔で、クミちゃんの怒りをなんとか抑え、鼻の穴を大きく開いて、電話にでた。今のところ、俺の体臭しか臭わない。

「もしもし、電話を代わりました。ここの事務所の責任者です」

クミちゃんの次は、電話の相手の怒りを抑えなければならない。引き続いて、こわばったままの笑顔から発せられる、猫撫で声で対応した。

「臭うんですよ、臭うんですよ。あなたも、ほら、臭うでしょ」

「話の粗方は、私どもの秘書から、承っております。ですが、この電話は、臭いの感受性機能が、付加されていないため、残念ながら、私は、臭うことができません」

「あら、あなたもさっきの人と同じ事を言うのね。じゃあ、仕方がないから、一度、家に来てくださいよ。家にきたら、きっと、門を入った瞬間から、いいえ、あなたが近所に車を止めて、ドアを開けた瞬間から、いえいえ、どこにあなたの事務所があるかは知りませんが、あなたが、臭いの感受性の機能の無い電話を持つ、ちんけな事務所から、一步出た途端、きっとこの臭いを感じますよ」

ちんけな事務所とは、余計な言い方だ。

「わかりました。それじゃあ、早速、今からでも、お家のほうに伺います。今も、臭うんですか。その、臭いって、どんな臭いなのですか。どこから臭ってくるんですか」

話の具体性は、全くないものの、単なる、本人の過剰なる思い込みだろう。最近よくある、一人暮らしや、家庭内での、寂しさを紛らわすための、孤独なメッセージだろうが、もし、万が一、そこに犯罪が隠れているのならば、探偵である俺は、どんなことでも嗅ぎ付けなければならない。探偵家業の俺の血が騒ぐ。見えない心臓から送り出されて、見える右手や右足、見えない左手、左足にまで、この熱い思いは、体全体に巡り、再び、戻ってくる。

「なにか、くさった粘膜を突き破るかのような、つーんとした、臭いですよ。私も、これまでの人生の中で、こんな臭いは、初めてです。とにかく、今の、既存の日本語では、表現できない感覚です。新たな言語表現が必要だと思います。探偵さん、あなたには、臭いの原因を探るだけでなく、この臭いを表す言葉を、現代日本語では無理ならば、古文、漢文、果てまた、英語を始めとする外国語から捜して欲しいですね。ひょっとしたら、亀甲文字や、ナスカの巨大絵、ストーンサークルの中に、ヒントが隠されているかもしれません。探偵さん、この謎を解けば、あな

たは、一躍、世界の言語学者として、羽ばたくことができるかもしれません」

相手の声が大きくなると同時に、話も大きくなってきた。そのうち、空飛ぶ円盤が、この鍵を握っているかもしれないと言い出すに違いない。それとも、タイムマシンに乗った未来からの使者か。とにかく、このまま、電話でいくら話をしていても、臭いの正体も、対処法も、そして、本丸である、電話の相手もわからない。

「ありがとうございます。折角の申し出ですので、羽ばたくことはできませんが、助走ぐらいはしてみます。電話では、なかなか、話しづらいこともあるでしょうから、とにかく、一度、お伺いします。できれば、今すぐにでも」

俺は、今日のスケジュールを確認した。とりあえず、午前中は、予定が空いている。多分、そんなに、時間はかからないだろう。

「あら、ありがとう。さすが、探偵さんね。対応が早いわ。これなら、臭いの原因もすぐにわかりそうよ。今からでも、お待ちしておりますよ」

「わかりました。それでは、すぐ参ります」

とにかく、話が長い相手の対処法は、現場に行くことだ。電話で、いくら話をして、全体の様子はわかるが、解決法は探れない。特に、電話を掛けてきた相手は、一方的で、思いのままの感情をこちらにぶつけてくるから、受け取る方も感情のこだま返しになってしまう。ほら、あなたも、聞いたことがあるでしょう。電話口で、大きな声で叫んでいる姿を。愛を叫ぶのならば、感動を呼ぶが、つばを飛ばしながら、罵る姿は、見ている者を、不愉快にさせる。電話は、最小限の、伝達事項の機能しかない。それ以上の込み入った話は、直接、顔と顔を突合せ、相手の感情を探りながら、言葉を選ぶ必要がある。

もちろん、その技量は、お互いに必要だ。相手にその技術が不足しているのならば、こちら側が、補わなければならない。会話の中で、二人の、濃密な世界を構築する必要がある。さあ、電話を置き、俺は、町へ出よう。いざ、行かん、香しき、匂い都へ。

俺は、住宅地図を車の助手席に置き、依頼者の元へ急ぐ。本当なら、カーナビを付けたいが、貧乏探偵事務所のため、それもままたらぬ。今度の仕事がうまくいけば、カーナビのが買える程度の報酬が貰えるだろうか、果てまた、くたびれ損で終わるのか。報酬はともかく、俺は、解決した後の、依頼者の笑顔が見たくて、この仕事をやっているんだ、と自分に納得させるように、探偵用爪楊枝を口に咥える。

おっと、少し行き過ぎだ。この辺りは、区画整理事業の関係で、道路が新しくでき、整然と区画された土地には、新しい家やビルが立ち並んでいるため、以前の知識では対応できない。かえって、昔の田んぼしかなかった頃の記憶が、今の俺の行動を邪魔している。過去に囚われて、未来が見えない。よくある話だ。と、言いながら、古木を訪ねて、新しい木が芽生えていることに気づくこともある。うーん、人生とは、その場、その場の、自分の都合のよい解釈で成り立っているのか。

まあ、俺のことはいい。問題は、臭いおばさん？だ。住宅地図から判断すると、あの、築二十余年余りの建物だろう。車庫のアコディーオンカーテンが、人生のレールから外れたかのように、

元には戻らなくなっており、庭には、何の統一感もなく、ただ、漫然と、草花が植えられている。砂漠化する地球を、雑草一本からでも、植栽し、守ろうとしている、緑のドンキホーテのようだ。風力発電システムは、導入されていないものの、屋根には、長年太陽に挑戦し続けて、黒色がやや灰色にくすみ、ホースにはひび割れ現象が見られる温水器が備え付けられている。

ひょっとするとこの家は、最後の審判の日に、人類の血を、未来へと引き継ぐ、ノアの箱舟かもしれない。俺も、透明人間という人類の一種として、是非、この船に乗り込みたいものだ。ただ、この船に乗り込むためには、深く、長い、臭いの川を渡らねばならないだろう。俺は、川を徒歩ではなく、車で飛び越し、玄関前に乗りつけた。車のドアを開け、門の前に立つ。

そのとき、家の中の部屋から、カーテン越しに、射すようなまなざしで。俺見つめる二つのブラックホールが見えた。俺の背中、まだ見えていない、産毛が逆立った。俺は、透明人間という、普通の人間よりも進化した形、それとも、より動物的なのかはわからないが、直感は鋭い方だ。

これまでの経験から判断すると、ここには来るべきじゃなかったと思った。チャイムを鳴らす手を引っ込め、そのまま車に乗り込み、この沈没決定の箱舟から、おさらばしようと思った瞬間、玄関の扉が開き、五十過ぎの、俗に言う、おばさんが、にこっという、不釣り合いな笑顔で、仁王立ちしていた。カモが来た、飛んで火にいる鴨が来た、今夜の夕食のおかずは、焼き鳥だと言わんばかりの笑顔に見えた。

「あら、いらっしゃい、探偵さん。あんた、探偵さんでしょ。隠さなくても、私にはわかるの。あなたの臭いは、探偵の臭い。普通の人臭いじゃないわ。電話で、お話ししたでしょう？私の鼻は、普通の人よりも敏感なの。特別の、大特別よ。だから、誰かが、私を狙って、毒ガスを撒こうとしたって駄目よ。瞬時に、臭いを嗅ぎ分け、危ない臭いと判断したら、ほら、この洗濯バサミで、私の鼻を摘むの」

目の前の臭いおばさんは、ポケットから、市販の、どこにでもある洗濯バサミを取り出すと、自分の鼻を摘んだ。

「どう、似合うでしょう。毎日、何回も、鼻をつまんでいるから、クレオパトラのように、日本人離れた高い鼻になってしまったわ。でも、心配しないでいいわよ、探偵さん。特に、私を女王様と呼ばなくてもいいから。もちろん、ひざまづいて、足の指を舐めなくてもいいのよ。残念なことに。後二十年、いや、十年若かったら、シンクロナイズドの選手として、オリンピックで、金メダルを獲得していたはずよ。もちろん、鼻の摘み方の美的表現力・技術力が、共に百点満点でね。ほら、笑ってよ。折角、初対面の緊張を解きほぐそうと、冗談を言っているのに。今は、クレオパトラから、じゃかまし娘か、山田鼻子か、に変身しているのよ。本当のことを言うと、探偵さんに会って緊張しているのは、実は、あ・た・し・なの。よくあるでしょう。子どもが、運動会やお遊戯会で、妙に、はしゃいで騒ぎ回ることが。今の、わ・た・し・も、それと、お・な・じ。うふふ。ゴメンねー、五十過ぎのおねえさんが、若い娘の真似をしても、あなたのハートを捕らえられないかしら」

（実際には、鼻を摘んでいるため、臭いおばさんの声はくぐもっていて、俺の耳には、はっきりと聞こえなかった。この文章は、俺が密かにズボンのポケットの中に隠し持っていた録音機で記

録し、後から、再現したものだ。最近の録音機は、ライターサイズだから、胸ポケットでも、背広の裏に入れておけば、相手に気づかれずに録音できる。探偵の七つ道具の一つだ。早く、八つ目の道具、カーナビを手に入れたいものだ。ただし、九つ目の道具の、毒ガス対策用の洗濯バサミだけは、入手したいと思わない。)

臭いおばさんの永遠に続く、機関銃のような演説から開放されるため、俺も、ささやかな単発銃で、対抗する。

「はい、はい、こちら、ハート探偵センターです。と、軽く、ジョーク返しをさせていただきます。早速ですが、お客様のいう臭いは、どこから、漂ってくるのですか。今のところ、私には、何の臭いも感じないのですが」

くじを引くのか、引かないのか、どちらか二つに一つを選択だ。十円玉が宙に舞い、表か裏かの賭けをして、表と言ったら、表が出た。後でよくみると、表同士をくっつけた十円玉という相手の策略に乗った以上、ここで、逡巡するのは、愚の骨頂だ。やるからには、スマートに、手早く、すませる必要がある。長引けば、長引くほど、こちらの腹は空いてくる。敵の陣地にいる以上、時間が長引けば、こちらの不利だ。針の穴一点に的を絞り、勝負に出る。

「あら、ありがとう。仕事を引き受けてくれるのね。どうぞ、どうぞ。まずは、家の中で、お茶でもいかが」

「お気遣いは、無用です。現場を、確認したいのですが」

こうした客との会話は、余計な修飾語は不要だ。単語だけ並べて、話をしてもいいぐらいだ。ひょっとしたら、身振り、手振りだけでもいい。

「さすが、ハート印の探偵センターね。仕事が早いわ。こちらが、臭いの元よ」

吉川という表札がかかった吉川さんは、俺を裏庭の方へ案内した。本来なら、芳川さんと表現すべきだろうが、俺の心の中では、臭いおばさんで決めている。臭いおばさんによると、この家は、新築されてから、二十が過ぎ、その間に、多種多様な草木が、世代交代を繰り返しながら、この庭の主となったそうだ。朝顔であれ、さつきであれ、松であれ、そこの場所に、静かに根付きながら、自己主張し、あわよくば、他人の領土までも奪い取ろうと身構えているように思える。犬や猫などのペットは、飼い主に、似てくるというが、盆栽や植木も、同様なことが起こるのか。一見、荒れ放題模様の庭だが、植物から言えば、伸び伸びと育ち、命の躍動感を表出していると言えよう。これなら、いろんな臭いも発生するだろう。

「いやー、緑溢れる植物から放出される新鮮な酸素に、心身ともに、癒されますね。花の匂いが充満して、心地よいですよ」

俺は、すべての問題が解決したことを悟った。もう。この家ともお別れだ。どんなに憎みあった中でも、「さよなら」だけが、互いの関係性を浄化させる。最後の、御奉公で、近くに置いてあった水遣りのじよろを満タンにして、目の前のゴールドクレストに、「大きくなってもいい、他人に迷惑をかけない生き方をしろ」と囁こうとした。

「ほら、臭うでしょ。こちら、いらっしゃい、探偵さん」

依頼主は、朝顔のつるの中に、顔を突っ込んで、俺を手招きしている。

「つるべじゃないけど、じよろで水をやっていますけど」

俺の本歌取りのジョークに、相手の笑いはなく、代わりに、罵声が返ってきた。

「誰が水をやってくれと頼んだの。あなたの仕事は、水遣りではなく、探偵よ。こっちよ、こっち」

吉川さんの後ろ姿、特に、大きな岩盤のようなお尻が、俺の行く先を塞いでいる。甘い水は、そちらにないことはわかっていながらも、俺は、ホタル嘘八百万匹に相当する大きなお尻に邪魔されながらも、明日の夜明けを待ちかねている朝顔のつぼみの中に、顔を突っ込んだ。

「ほら、隣の家が得るでしょう。立ち上がり三十センチの基礎のところどころに配置され、縁下につながるの通気溝よ。あそこから、私にとって、いやな臭いが出てくるの。あっ、臭う、臭う」

おばさんは、ポケットから、金メダル養成洗濯バサミを取り出すと、やおら、自分の鼻をつまんだ。

「探偵さん、あんたも、早く、これをつけないと、毒が頭に回って死んでしまうわよ。私のものでよければ、これ使いなさい」

おばさんは、何を思ったのか、自分の鼻につけている洗濯バサミを、わざわざ取りはずし、俺に手渡してくれた。そして、自分は、ズボンのポケットから、もうひとつの洗濯バサミを取り出すと、何の躊躇もなく、鼻につけた。俺は、手渡された洗濯バサミを、付けようか、付けまいか迷いながら、じっと見つめている。

「何を迷っているの。ここは、戦場よ。一瞬のためらいが、自分の命を失うし、仲間の命も死の危険に晒すのよ。ほら、それなら、私が付けてあげる」

臭いおばさんは、再び、自分の鼻の洗濯バサミを取り外すと、やおら、俺の鼻に挟んだ。

「いたたたたたたあー」

強引に、シンクロナイズドスイミング鼻用金メダル養成洗濯バサミをつけられた俺。毒ガスの臭いよりも、臭いおばさんの体臭と化粧品の匂いが混じり合い、自家発酵した臭いのほうが、断然、俺の命を死に至らせる臭いだ。

そんな俺を尻目に、臭いおばさんは、再びの、再び、ポケットから、洗濯バサミを取り出し、自分の鼻に装着する。臭いおばさんのポケットには、一体、いくつの洗濯バサミが入っているのか。叩けば、叩くほど、洗濯バサミが、増えるのか。

「さあ、これで安心よ、でも、いくら、毒ガス対策用洗濯バサミを付けていたとしても、直接、敵の毒ガスを吸えば、命が、いくらあっても足りないわ。十分、気をつけて。ほら、隣の家、通風孔を見て。あそこよ、あそこ。あそこから、毎日二回、朝と夕方の決まった時間に、毒ガスが私の家のほうに向かって、発射されるの。ほらもう直ぐ、定時の五時だわ。十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、ファイヤー！ひー、危ない、あんたも、しゃがみなさい」

臭いおばさんは、無理に矢理に俺の頭を抑えつけ、その場に、しゃがみこませた。目をこれまで以上に見開いたが、俺には、何も見えなかった。自分を攻撃してきたと思われるのに、臭いおばさんは、顔をほころばせ、何だか、この危険な？状況を楽しんでいる様子がある。

「探偵さん、あんたも、見えたでしょう？ええええ、わからなかったの。白い煙が、あの通風孔

から、発射されたでしょう？あなた、危なかったのよ。私が、あなたの頭を押さえつけなかったら、まともに、毒ガスミサイルを受けて、今頃は、体だけ、この世に残して、別の世界で、探偵やってるわよ。私に、お礼を言ってもらわないと。まあ、今日は、私が隣についているし、初めてだから仕方がないけど。いつもいつも、私があなたと一緒にいる訳にもいかないから、次からは、あなた一人でも、細心の注意を働かせないと、大変なことになるわよ」

俺は、知らない間に、臭いおばさんの一味になっていた。臭いおばさんの指揮下にはいっていた。まだ、誰も、この仕事を請け負うといったわけではない。おばさんが、勝手に、俺を、自分の世界に引きずり込もうとしているわけだ。

「ありがとうございました。でも、毎日、二回も、毒ガスが発射されているのに、吉井さんの庭には、何の兆候もみられませんね。それに、隣の家の人だって、こんなに、家が近かったら、自分の発射した毒ガスを吸い込むおそれがあるでしょう？私には、その当たりが、よく、わからないのですが」

「あら、あなた。私の言っていることが、信用できないわけね。そりゃ、そうだわね。いきなり、毒ガス攻撃を受けて、命を失いそうになったのだもの。頭がパニックになるのは、仕方がないわね。ほら、毒ガス攻撃を受けた、証拠よ。あの盆栽の松を見て。五つの鉢ともすべて、青々としているはずの松が、茶褐色に変わっているでしょう。これが、最大の証拠よ。他にも、家の壁に、ひびが入っているの。敵は、これまで、一年間にも渡って、私や、私の家族を攻撃してきたけれど、いまだに、私たちがぴんぴんと飛び跳ねているから、真綿で、首を絞めるやり方から、家ごと、私たちをふっとばそうとする手法に変更してきてるみたいだわ。敵を侮っちゃ駄目よ。誰にでも、あいさつや、ニコニコして、愛想がいい、家族のように見えるけど、腹の底は、何を考えているのかわからないわ。多分、普段、周囲の家に、気を使ってばかりいると、突然、感情が爆発してしまうのよ。よく分かるの、私だって、これまで、主人や子どものために、どれほど尽くしてきたことか。今朝だって、家族の誰一人よりも、早く起きて、お昼のお弁当のおかずは何にしようかな、昨日は、冷凍のコロッケだったから、今日は、昨晚の残りのじゃがいもの煮っころがしにしようかなと、毎日、毎日、隠れたベストラー「今日のお弁当のおかず読本」を片手に、頭を悩ませているのに、夫や子どもは、会社や学校に、持って行くときも、家に帰って来て、空の弁当箱を取り出すときも、「ありがとう。おいしかったよ」の言葉がないのよ。別に、お礼を言えと強制しているわけでも、感謝の押し売りをしているわけでもないのよ。いくら、家族だといっても礼儀ぐらいあるじゃない。家族って何。家族は、ひとつの有機的な結びつきだと思うわ。例えば、主人が、頭で、子どもが手足。私が胴体みたいなものじゃないかしら。わかった。だからこそ、あるもの、存在することが当たり前として、感謝の念が湧かないのかしら。普通の人には、自分の手や、足に、今日もよくパソコンを打ってくれて、ありがとう。お陰で、これまでにない斬新な企画書が作れたよ。これで、次の営業会議では、駄目ダシもなく、すんなりと通ること間違いなしだ。このプランが実行され、成功に至れば、会社は、ますます大きくなるし、今は、係長の俺も、二段飛ばしで、部長に、出世するだろう。それに何より、一般のお客さんが喜んでくれるだろう。それが、俺の一番の楽しみだ。子供たちが、俺の企画したプラモデルを買い、早く家に帰って、作り上げるのを待ち望んでいる。傍らの父親も、かつて、自

分の子どもの頃を思い出し、自分の姿と子どもの姿を重ね合わせ、うれしさの余り目を細めている。こんな、光景に出会うために、俺は、一週間もて通夜を続け、この企画書を練り上げた。最後を、締めくくってくれた、俺の手よ、本当に、お疲れさま。途中、キーボードの叩きすぎで、指や前腕部が痙攣したこともあった。それも今となっては、懐かしい思い出だ。今晚は、もう、パソコンに触ることも、近づくこともしないでいい。明日から、また、新たな、戦いが始まる。束の間の休息だが、十分休んで欲しい。って、探偵さん、あなたも、自分の指や手、腕に感謝したことがある？」

突然、真理をついた質問に、俺は、一瞬、たじろいだ。返す言葉が見つからなくて、頭が真っ白だ。今なら、先着先着百名様に、俺の頭の中のホワイトボードを待ち合わせのための伝言板にしてもいい。明日、朝、午前九時までなら、消さずに置いておこう。そんな状況だ。

確かに、俺の事務所のクミちゃんには、感謝、感激、神様に崇め奉り、大阪へ出張したときは、おみやげに、必ず、雷おこしを買ってくることになっている。彼女は、透明人間の俺を、恐れることなく、普通の人と同様に、いや、とりあえず、社長として、接してくれている。もちろん、俺は、クミちゃんを、単に、事務員として感謝しているだけではなく、淡い恋心も抱いているのだが。そんな気持ちも、透明化されてしまい、表面上は、おくびにもださずに接している。雷おこしで、関心を持ってもらおうと思うなんて、少し、間抜けだな。

よし、今度は、高さ百メートルと五千二百四十センチのシンボルタワーの最上の三十階で、フランス料理のダイナーコースをご馳走しようか。早速、今月号の情報誌「ナイス街角」の企画「同僚以上、恋人未満のあなたたちのデートコース」を参考に計画してみよう。何だか、心がワクワク、ウキウキ、フワフワしてきたぞ。さて、何の話だったか。そうだ、自分の手や足など身体に感謝したことがあるかどうかだ。

「確かに、奥さんのおっしゃるとおりですね。自分の、手や足、目や耳、口や鼻、外側だけでなく、内側の、心臓や肺、胃、大腸などの内臓器官、血液など、自分を生かしてくれている、全ての、一つ一つの細胞に感謝すべきでしょうね」

毒ガス攻撃を受けているなどと、馬鹿げたことを言っているから、こちらも少し、いや、大変、相手をなめてかかっていた節がある。現代の人間は、情報や知識ばかりが先行し、つまり、大脳ばかりが働いていて、人間イコール脳、と決め込んでいる。人間は、様々な細胞から成る有機体という認識が欠けている。汗をかくことを、極端に、いやがるのも、この風潮だ。脳だけで、人間が成り立っているわけではない。この過大にして、過度なる脳至上主義が、身近なごみ問題、自然破壊、地球温暖化、奇種動物の絶滅化に拍車をかけているのだろう。

「あら、探偵さん、いやに、素直に、私に言うことに従ったじゃない。それなら、私が隣家から、毒ガス攻撃にあっていることも、信じて欲しいわね。ひとまず、この場所を離れて、作戦本部に戻りましょう。相手が手を出してきた異常、こちらも次の手を考えないといけないわ。さあ、探偵さん、行くわよ。でも、音を立てずに、身を伏せ、相手にこちらのこと感づかれないようにしないと。特に、この秘密兵器、毒ガス対策用洗濯バサミは、相手に見せられないわ。ひょっと、この存在を知られたら、次に、いかなる攻撃を仕掛けてくるか、わからないもの。相手に、油断させ、有利な状況にあると思わせることこそ、最大の、攻撃よ。守るも、攻めるも、楽しい

わね」

臭いお婆さんは、攻撃を受ければ受けるほど、つまり、相手が関心を持ってくれればくれるほど、いきいき母さんになってくるらしい。臭いお婆さんの声に引きずられて、俺は家の中に入った。

「さあ、もういいわよ。防毒バサミをはずしても。でも、よく似合うわよ、その洗濯バサミ。洗面台に、鏡があるから、見てみたら。もし、よければ、そのまま付けていてもいいし、カメラ付き携帯電話をお持ちなら、待ち受けの写真にしてもいいんじゃない。その写真と、「戦時中から安息日まで、いつでもハート探偵社は、あなたをお待ちしています」のキャッチコピーを組み合わせた名刺を作れば、探偵さんの株が上がるわよ。そのためにも、お土産に、ひとつ持って帰ってもいいわよ。でも、これが、今日の探偵さんの報酬よ。ははははははは」

臭いお婆さんの声に、俺は慌てて洗濯バサミをはずす。慣れとは恐ろしいものだ。いつのまにか、臭いお婆さんの世界の中に、どっぷりと浸かってしまい、鼻の洗濯バサミに気づかなくなってしまった。俺の鼻だけでなく、頭の中までもが、臭いお婆さんの毒ガスに侵されてきたのかもしれない。

「でも、ひょっとしたら、このまま付けていたほうがいいのかもしいわね。実は、隣の家からの攻撃は、縁の下からの毒ガスだけじゃないの。実は、ここだけの話だけど、隣の方は、何か、不思議な薬を使って、自分の体を小さくして、家の鍵穴や、小さな隙間から、この家に侵入してくるの。あら、また、そんな、顔をして。私のこと信用していないでしょう。ちゃんと、その顔に書いているわ。もちろん、私も、初めは、そんなこと絶対あるはずがないと思っていたわ。毒ガス攻撃だって、そうよ。どうして、隣の方が、私や私の家族を攻撃してくるのかわからなかった。でも、人間の行動に、動機や理由なんていらぬのかもしれない。その場、その場の、瞬間的な欲望や感情から行動するのであって、終始一貫とした理由なんて、後づけじゃないの。あなたが、探偵さんだからこそ、私が言うことがわかると思うの。テレビや新聞で、よく犯罪の動機について、有識者が知たり顔で語っているけど、本当に、そんな明確な意思があったのかしら。何か、もやもやとした感情があったかもしれないけど、それは、後から、無理やり、本人や第三者が、物語を作り上げたものだと思うの。多分、そこには、脳の中で、理性と感情が、大きく葛藤しているのだわ。自分の行動を、筋道が立ったもの、理由があったもの、理性的であるものと信じて疑わないの。いいえ、信じたいのよ。そこには、感情が、悪だという認識が強いのかもしいわね。そのくせ、いくらいいことをしたとしても。後から話を聞けば、俺は、知らなかった、話を聞いていない、すぐに、怒り出す、特に、物事がよくわかっている、指導者たちがいるじゃない。ほんと、人間って、感情が九十九パーセントの動物ね。自分のことは、棚に上げておいて、他人には、いやに感情的ですね、って批判めいたことをよく言うけど、人間から感情を取ったら、単なる、でくの棒よ。おじいさんを困らせたピノキオのほうが、まだましよ」

臭いお婆さんの、言葉攻撃に、俺は黙って頷くしかない。全てが、もっともだけに、当てはまるだけに、これからは、臭いお婆さん、改め、百パーセント感情お婆さんと名付けよう。そして、俺は、九十九パーセント感情探偵と自称しよう。ささやかながら、一パーセント理性を持って、探偵という職業に就く。この一パーセントは、相手の話を聴くという点においてだ。この一パ

ーセントだって、いつ、消え去るかわからない。

「あらららあ、らーめん、あーめん、ちゃんぽんめん。ごめんなさいね。ほんと、九十九パーセントの感情をあなたにぶついたりして。体だけじゃなくて、心も、毒ガス攻撃によって、蝕まれているのかも知れないわね。最近、怒ったり、笑ったり、泣いたり、何も感じなかったり、毎日、毎時間、毎分、毎秒ごとに、目まぐるしく、入れ替わり立ち代り、感情の波が押し寄せてくるの。分かっているんだけど、つい、他人に、ぶついたりしてしまう。あら、探偵さん、その眼は、何？なんだか、私を疑っていないかしら？感情が激しく入れ替わるのは、毒ガスのせいじゃなく、更年期障害のせいだとも言いたそうね。私だって、その方が、いくらか増しだわ。隣の家が、自分の家族を毒ガスで攻撃してくるなんて、誰が考えても可笑しいわよね。最初、私だって、変な臭いがするから、鼻の病気かしらと思って、耳鼻咽喉科で診察してもらったけど、何の症状もみられなかったわ。それも、町医者じゃなくて、ちゃんとした総合病院。そう、市内の中心部、県庁や市役所をも凌駕する建物、日青病院よ。普通、こんな地方都市だと、県庁や市役所が建物だけは立派だけど、日青病院も、ひけをとらないくらい立派。もちろん、建物だけが素晴らしいという意味じゃなくて、医療機械だって、最新式よ。特に、病院のスタッフは、人間的にも、治療技術においても、最高の方々よ」

百パーセント感情おばさんは、目をうるうるしながら、喉はごろごろ転がしながら、口からはぶくぶくと唾を泡立てながら、演説を続ける。この辺りで、息継ぎをしないと、呼吸の吐き過ぎで、酸素が不足して、倒れてしまうだろう。息継ぎなしの面かぶりクロールだって、一分、二十五メートルが限界だ。このまま倒れられたら、俺が、白亜の塔の病院へ運ばなければならなくなる。この俺こそ、中途半端な、半透明人間を治療して欲しいと思っている。

「立ちっぱなしじゃなくて、まあ、座りませんか」と俺は相手の話の腰を折る。

「毒ガスおばさんじゃなくて、百パーセント感情おばさんじゃなくて、そうそう、安藤さん、よっぽど、日青病院での待遇がよかったのですね」

「それほどでもないんですけどね。たまたま、病院に行ったときに、エレベーターに乗って脳神経科に行こうとしたら、看護師さんが、何階でしようかって、尋ねてくれたんですよ。それが、とても嬉しくて、それ以来、日青の大ファンなんです。そんなことぐらいかと思われるでしょうが、人間って、そんな、些細なことに感動や感激するものなのよ。さっきから、私が言っているように、人間は、キュ九十九パーセント感情で生きている動物なの。このこと一つとっても、十分な証明になるわ」

自らの理論を自らの体験談で証明する感情おばさん。反論の余地は、全くない。あなたは、私よりも、九十九パーセント、いや、百パーセント長生きするでしょう。俺は、ただ、ただ、頷くしかなかった。

「病院の話はおいておいて。そう、隣の家からの侵入者だけど、どうも、二階の寝室に忍び込んで、天井裏から、何か薬を巻いているの。探偵さんには、是非とも、寝室を調べて欲しいわ。私の言っていることが、本当だと、更に、確証を得ることができるはずよ」

感情おばさんに連れられて、俺は、階段を上り、毒ガスの小部屋に入った。そこは、壁がビニールクロス、床はフローリング仕様で、ダブルベッドがひとつと、七段の引き出しがついた箆箆

、観音開きのクローゼットがあるだけだ。頭を上げ、天井を見ると、壁と同様、ビニールクロスが張られている。長い年月のせい、そうじが不十分なのか、薄汚れているものの、雨が染み込んだ跡はない。もちろん、薬を撒いたような痕跡もない。

「なんにも、変わった様子はありませんけれど」

後ろを振り返ると、感情おばさんは、廊下で立ったまま、俺を凝視している。鼻には、オリピック養成洗濯バサミがつけられていた。

「そう、私には、臭いますすけどねえ。ほら、さっきと同じ臭いですよ。探偵さんも、早く、防毒ハサミを付けないと、天国行きですよ。それでなくとも、ここは二階なんだから、先ほどの庭よりも、あの世に近づいているんですよ。この家では、この部屋が天国に最も近い場所として、家族中から、認識されているわ。ちきしょー、くやしいわね。探偵さんと居間で立ち話をしていた際に、隣の人が、密かに、この部屋に入って、薬を撒いたみたいだわ。探偵さんも、早く、毒ガス用洗濯バサミをつけないと、大変なことになってしまいますよ」

毒ガスおばさんは、再び、元の状態に戻った。先ほどの、弁舌軽やかな、かつ、思慮に満ちた姿はない。ただ、ただ、自らの世界に舞い戻ったみたいだ。私は、舞戻れるのか？

「ほら、扉のノブのここ、蛍光灯のそこ、天井の隅のあそこ、それに、部屋全体のどこもかしこに、毒液が散布された後がみえるでしょう？敵は、賢いから、一回吹き付けた後、ワックス掛けのように、天井や壁に塗り込んでいるから、一見すると何も無いように見えるけど、長年の習慣から、私にはわかるの。こんなことされると、私は、一体、どこで睡眠をとればいいのか。一階では、毒ガスが流れ込んでくるし、二階では、毒液が散布されている。足の踏み場どころか、空中に浮かんでいる場所もないわ。私は、私たち家族は、もう、ここに住めないのね」

臭いおばさんは、百パーセント感情おばさんとなり、廊下に座り込んで、泣き出し始めた。俺は、慰めの言葉を捜すよりも、いかに早く、ここから抜け出す切り口上のみ考えていた。

「吉川さん、あなたのお気持ちはよく分かります。この問題は、探偵の私よりも、ご主人さんや家族の方と相談すべきではないでしょうか。そうすれば、もっとよい解決方法が見つかると思います。それでは、私は、ここで失礼します」

我ながら、百パーセント冷静かつ優等生の発言だ。俺の頭の中が、見えない毒ガスで侵食されないうちに、何としても、早く、ここから脱出しないと。探偵から囚人への変身だ。

「あら、探偵さん、お茶もいれないですいませんねえ。何しろ、ゆっくりとお茶を飲む暇がないほど、敵から攻撃を受け続けたため、私も、頭の中が、錯乱状況でしたわ。とりあえず、一階に下りて、話の続きをしませんか。近所の八百屋さんで、自家製の手作りムースを買ってきているから、是非、食べてみてください。この物価高の折に、消費税込みで百五円という安さなんです。しかも、八百屋さんで、デザートを売っているんです。折からの健康ブームと、自分自身に徹底的にこだわるマイブームとの相乗効果で、人気沸騰中ですよ。おきに召したのなら、帰りにでもちょっと寄ってみて、もし、売り切れていなければ、事務所の受付の方に買って帰ってあげてくださいよ。ちょっとした気遣いが、人間関係を円滑に運んでくれますよ。それに私だって、一人で食べるよりも、多くの人と食べるほうが楽しいですから。インスタント食品やファーストフードが流行っているので、とかく、個食になりがちですけど、本来、食事は、物をおなかに

詰め込めるのが目的じゃなく、家族や仲間と一緒に、時間を過ごすことが大事なことだと思うの。その時間の積み重ねが、人間関係をより一層深めていくことができると思います」

出た出た、彼女の心の叫びが、マグマのように、再び、噴き出してきた。今度の思いは、先ほどよりも重いのか、軽いのか、それとも、熱いのか、少し冷めているのか、分からないが、臭いお婆さんの姿は、そこにはない。臭いが、彼女の心を分厚く、覆っているだけなのだろう。それとも、自らの防御策として、臭いの壁を作っているのだろうか。

「ありがとうございます。お話をお伺いして、状況はある程度掴むことができました。私の方でも、聞き込みや近所のフィールドワークなどをして、搜索してみます。何らかの結果が分かり次第、連絡いたします」

「そんなこと言って、早く、この家から逃げ出したいだけなんでしょう。探偵さんの気持ちなんてまるわかりよ。なんたって、私は、小さい頃から、文学少女で、シャーロックホームズを始め、怪人二十面相、怪盗ルパンなど小学校の図書館で、読み耽ったんだから。基礎はしっかりしているわ。でも、その後は、あまり本は読んでいないから、柱は、しっかりとしてはいないけど。昔、読んだ本の知識で、直感だけは、鋭いの。だからこそ、大事に至るまでに、隣家からの毒ガス攻撃を感じることができたの。でも、この鋭敏に、研ぎ澄まされた感覚も、時には、外れることがあるわ。その一番大きいのが、今の、旦那を選んだことね。ほら、笑ってよ。久しぶりに、冗談が言えたのだから。探偵さん、あなたに来てもらえてよかったわ。お陰で、心がすっきりしたみたい」

俺も、臭いお婆さんの笑顔が見えて、少しは、楽になった。だからといって、ここから立ち去りたい気持ちがなくなったわけではない。

「それでは、また、連絡します」

言葉だけを残して、体まるごと、この家から出た。振り返ると、臭いお婆さんは、俺と出合ったことなど忘れてしまったかのように、鼻歌まじりで庭の草むしりに精を出している。俺は、二度と連絡などしまいと心に固く誓い、俺の臭いが充満している愛車に乗って、臭いお婆さんの家を後にした。

事務所に帰り、クミちゃんに、臭いお婆さんのことを簡単に説明し、多分、二度と連絡はないだろう、もし、あったとしても適当にあしらってくれと話しをした途端、ドアをどンドン叩く音がした。これは、ノックではない。今にも、ドアを叩き割りそうな、土砂降りの拳攻撃だ。

「探偵さん、探偵さん、開けて頂戴。居るのは、分かっているんだから。昼間の、吉川です。隣の家からの、新たな攻撃を受けたのよ。その証拠を持ってきたから、緊急に調べてください」

俺は、クミちゃんと目をあわす。驚きで、目がまんまるのクミちゃんは、

「先生、どうします？このまま、居留守のまま、放っておきますか？それとも、ドアを開けましょうか？」

「臭いお婆さんの今のままの勢いだと、ドアを叩き壊すも違いない。おんぼろ事務所だけど、ドアなしでは、営業が続けられないし、大家さんに弁償しなければならない。それに、他の事務所の人にも迷惑がかかる。仕方がない。ドアを開けよう」

「先生、「臭いお婆さん」ですか。それって、面白いネーミングですね」

「いや、もうひとつ、「百パーセント感情おばさん」という源氏名もある。」

「「臭いおばさん」のネーミングを全国に向けて公募しましょうか？全国から、多くのメールやはがきが送られてくると思います。そうすれば、ひとときだけ、世間から注目を受け、寂しさから逃れられるんじゃないでしょうか」

「うーん、クミちゃん、さすが、探偵事務所に勤めているだけあって、臭いおばさんの臭いの原因を見切ったね」

「先生、誉めていただいてありがとうございます。門前の小僧じゃないけれど、あたしも先生のように、探偵になれるでしょうか」

「もちろん、成れるよ。私以上に」

「でも、今回のケースは、特に、推理したわけでもなんでもないんです。女の人って、何か寂しくなると、妙に、何事かに熱中したり、また、他人から、無視されればされるほど、関係性を欲しくて、攻撃的になったり、ホント、自分でもどうしていいのかわからなくなるときがあるんです」

「それは、男でも同じだよ。太古以来、生命体が、種族のDNAを未来永劫につなげるため、天変地異のいかなる環境の変化に対応できるよう、雌雄に分かれた結果、人は、自分以外の誰かを求める定めになっているんじゃないのかなあ」

「あら、さすが先生。推理は、百億年前までに遡りますね」

クミちゃんと、こうしてまともに話をするのも久しぶりだ。普段は、仕事の忙しさにかまけて、じっくりと話をする暇がない。流れていく関係性を、少しでも深めていくためにも、週に一回は、仕事に関係しようが、しまいが、ミーティングを開催しよう。たった二人だが、二人から、関係が始まるのだ。そんなきっかけを与えてくれた臭いおばさんに、感謝の気持ちを。おっと、クミちゃんとの二人の世界に埋没している間も、臭いおばさんは、入り口のドアを叩き続けている。

ドドン、ドン、ドン、ドドン、ドンドンドンドン、ドン、ドドン。

最初の怒りにまかせた叩き方から、いつしか、人の心を掴む、心地よいリズムに変わっている。俺は、ドアをゆっくりと開けた。

「探偵さん、出てくるのが、遅いじゃない。お陰で、ドアを叩くのが楽しくなって、足はリズムを踏んでいるわ。もし、よければ、ばちか、棒か、なければ、割り箸でも持ってきていただけたら、ありがたいんだけど。なんだか、音を出すのが楽しくなってきたみたい。でも、この手を見てよ。小さい頃は、赤頭巾ちゃんの手みたいといわれた手が、ドアの叩きすぎで、こんなに膨れ上がり、しかも、皸だらけ。また、血管は忍苦に耐えきれずに、青筋を立てて浮き上がっているじゃないの。一体、どうしてくれるの」

「いやー、すいません。今、会議中で、激論を交わしていたため、吉川さんのノックの音に気がつかなかったんです」

「二人しかいないのに、激論だなんて変ね。それに、部屋の中から、大きな音は聞こえなかったみたいけど。でも、そんなことはどうでもいいわ。ほら、これよ。敵の毒ガス攻撃の証拠よ」

臭いおばさんは、手に持っていたバッグを、俺とクミちゃんの前に突き出した。

「これよ、これ。敵は、とうとう、恐るべきことに個人攻撃を始めだしたのよ。探偵さん、ほら、バッグの中を臭ってみてよ」

臭いおばさんは、バッグのふたを開け、俺の顔の前に突き出した。汗をふいたハンカチのせいか、バッグの中は、少しすえた臭いがした。また、小銭が、転がっているのか、お金特有の、金属的な臭いもした。毒ガスがどのような臭いなのかは知らないけれど、俺が臭うのはそれだけだ。もし、本当に、バッグの中に、毒ガスが充満しているのであれば、俺もクミちゃんも、毒ガスを臭う前に、その場で倒れているだろう。

「毒ガスの臭いがどういったものか分かりませんが、バッグの中は、取り立てて、異臭がすることはないですけど」

俺は、バッグを臭いおばさんに戻した。

「本当に、何も臭わないの、探偵さん？原因は、これよ、このハンカチよ。敵は、毒ガスをこのハンカチに染み込ませて、私が知らない間に、そっと、バッグに忍ばせ、毒ガスのエキスを吸わせて倒れるのを待つ企みななのよ。いきなりじゃなく、真綿で首を絞めるように、じつくりと死の訪れを呼び込む作戦なのね。あの意地の悪い隣の奥さんが考えそうな計画ね。でも、大丈夫。私には、探偵さん、あなたがついているわ。あなたのお陰で、敵の攻撃から、未然に、私の命を救ってくれたのね。本当に、感謝するわ」

「私は、何も、していませんし、特段、このハンカチが特別なものとは思われませんが」

「あらららららららら、探偵さん、遠慮しないでもいいわ。真の名探偵は、自分が何もしなくても、周りが勝手に動いて、事件を解決するものなのよ。例えば、名探偵コナンに登場する眠りの小五郎のように」

誉められているのか、貶されているのか、よくわからない。だが、ここは、臭いおばさんの家のある、ホームではない。俺の事務所の廊下の、公の場所だ。一方的に、おかしいことをしゃべられると、近所迷惑のほかならない。道路にごみを撒き散らすように、公の場で、意味不明の声を発するのも、公衆道徳に反する行為だ。俺の気持ちを察してか、クミちゃんが、臭いおばさんに、忠告のミサイルをぶっ放す。

「ここで大きな声をあげますと、他の事務所の方に、迷惑です。どうぞ、事務所にお入りくださいとお願いのところですが、事務所の営業時間は、既に、終了していますので、また、明日にしてくださいでしょうか。こちらから、再び、連絡をさせていただきます」

「何よ、あんた。ひよっ子の探偵のくせして、余計なこと、でしゃばるんじゃないわ。あっ、そうか、あんたも、うちの隣の女のぐるなのね。ひよっとしたら、このハンカチに毒を染み込ませたまま、得意の、体を小さくする秘術を使って、私のバッグに忍び込んで、探偵さんの事務所についてきたのね。恐ろしい女だわ」

臭いおばさんは、クミちゃんを、まるごと飲み込んでしまうかの勢いで、食って掛かる。

「いや、彼女は、うちの事務所の人間で、決して、吉川さんのおっしゃる、隣の家の回し者ではありません」

「探偵さん、あなた、まだまだ甘いわね。さっき、折角、誉めてあげたのに、今の発言で、全て、帳消しだわ。評価五から、マイナス五ね。もちろん、五段階評価よ。マイナス五があるという

ことは、十段階評価ということかしら。もし、マイナス百三に相当するとしたら、全部で、百八段階評価になるわね。悲しいわね、人間って、やはり、煩惱のなすがまま、人生を流されていくのかしら」

臭いおばさんの流されて行く言葉に翻弄されるまま、俺とクミちゃんは、天下の公道の廊下に突っ立っていた。

その時、流されて行く場面を、大きく変える事件が起こった。廊下の向こうから、男の人が歩いてきた。景山さんだ。俺の事務所の隣で、司法書士の仕事をしている。昔、市役所で勤務していたが、人間関係にいやけがさし、「こんな仕事、くそぼっこだ」と叫び、定年まで、相当年数があるのにやめたのだと、昔、聞いたことがある。離婚問題など、様々な仕事の関係で、相談したりすることが多い。景山さんは、俺たち、三人に気がつき、声を掛けてきた。

「こんばんは。どうしたんですか、廊下の真ん中で、立ち話をして。部屋が必要ななら、私の事務所の相談室を使ってもいいですよ。あら、あなたは、ひょっとして、藤原さんじゃないですか、久しぶりですね。小学校と中学校の同級生の、景山ですよ」

「景山さん？あら、思い出したわ、景山君ね、本当、全然、変わっていないじゃないの」

「いやー、ありがとうございます。でも、髪の毛は薄くなったし、眼は、老眼気味だし、あの頃と比べて、大分変わったと思いますが。それより、藤原さんこそ、全く、変わっていないじゃないですか。素敵な笑顔はそのままだし、スタイルだって、あの頃のままじゃないですか。確か、藤原さんは、陸上部で、僕は、帰宅部。毎日、下校中に、藤原さんの走る姿に、心ときめかせたものですよ。今でも、カモシカのようなすらりとした足が鮮明に思い出されますよ。いやー、藤原さんに、こんなところで会えるなんて、光栄ですよ。神様に感謝しないと」

「景山君、ありがとう。おせいじでも、嬉しいわ。でも。ほら、昔に比べて、こんなに太っちゃって、肌もかさかさ、髪だってぼさぼさよ」

「いくら、藤原さんが年齢を重ねても、僕にとっては、永遠のヒロインですよ。憧れの君は、変わりません」

「いやだわ、景山君ったら。口だけは、上手くなって。中学生の頃は、黙ったままで、あまり話しななかもしなかったのに」

「藤原さんが、眩しすぎて、とても、僕ごときが近づける様子じゃなかったでしょう？藤原さんの周りには、いつも、女の子が取り巻いていて、他のクラスの男は、廊下越しに、あなたを見つめていましたよ。僕だって、休み時間になると、用もないのに、藤原さんの席の近くの男子に近づいて、深夜番組の内容をしゃべりながらも、心は上の空で、藤原さんの横顔ばかりを見つめていましたよ」

「やめてよ、景山君、そんな昔のことなんか話をして」

「もし、藤原さんが、よければ・・藤原さんとお呼びしていいですか？」

「今は、結婚して、吉川です」

「それじゃあ、吉川さん、もし、時間が許すのならば、近くの喫茶店で、昔のことでもお話しませんか。四十年あまり、心に秘めていた思いを、是非、聞いてもらいたいなあ」

「いやだわ、景山君ったら。こんな、おばさんをからかったりして。でも、主人は、今日も、仕

事で遅くなると言っていたし、息子は、部活と塾で遅いから、時間なら、少しありますけど・・・」

「それは、有難い。是非、短い時間で結構ですから、お話できませんか」

「でもねえ、こんな、おばさんだから・・・」

臭いおばさんは、口では、景山さんの誘いに、なかなか乗ろうとしないように見えるが、体は、既に、ここまで来た方向と反対の方向を向いている。

「それじゃあ、まいりましょう、藤原さんじゃなくて、吉川さん。でも、私にとっては、永遠に、「藤原さん」のままです」

景山さんの言葉に促されるように、臭いおばさんは、我が事務所を後にした。その場に残された俺とクミちゃんが、互いに、顔を見合わせていると、三階の階段を下りようとした景山さんが、私たちの方を振り返り、にやっと笑い、目配せをした。俺とクミちゃんは、景山さんに、お辞儀をして事務所の中に入った。

「景山さん、あの臭いおばさんのこと、昔、本当に、憧れていたんでしょうか」

「さあ、分からないけど。景山さんが、私たちに大きな助け船を出してくれたことは確かだよ。ついでに、その船に、臭いおばさんを乗せて、遠くへ連れて行ってくれた。明日、景山さんに、お礼を言わないと」

「本当ですね、先生」

俺とクミちゃんが、あれやこれやと話をしていると、電話が鳴った。

「はい、こちらは、ハート印の探偵事務所です。あっ、吉川様ですか。はい、先生と変わります」

クミちゃんの差し出す受話器を俺は受け取った。

「探偵さん、先ほどは、突然、お伺いして、ごめんなさいね。でも、お陰で、同級生の景山君と、ホント、三十数年ぶりに会えました。人生、何が、幸いするのか、分からないわね。あれから、景山君と、約二時間も、昔話で花を咲かせ、今、自宅に帰ってきたばかりよ。それで、臭いことなんだけど、不思議なことに、隣の家や、二階の寝室、そして、私のバッグには、これまで、臭っていた毒ガスの臭いが全くしないの。もちろん、臭い浄化装置付洗濯バサミはとりはずしているけど。それどころか、不思議なことに、今まで、毒ガスの臭いしかなかった私の周りが、急に、パンジーや朝顔やひまわりなど、花の匂いに囲まれたのだ。まさか、あなたが、小人になって、私の家に、花の香りを吹き付けたわけじゃないでしょうけど、ふふふ。とにかく、探偵さん、これまで、色々とお世話になって、本当に、ありがとうございます。これから、私、強く生きていけそうな気がするの。そうそう、景山君は、今、各地域で行われるマラソン大会に出場しているんだって。「もし、よかったら、藤原さん、あっ、すいません、吉川さんも、一緒に、走りませんか」って、誘われたのよ。ランニングなんて、三十年ぶりよ、私に、走れるかしらと答えたんだけど、景山君が、「僕が、タイムマシンを持っていますから、カモシカのようなあの頃に戻りませか、藤原さん」と言われたの。タイムマシンなんて、そんなもの、SF小説の世界にしか存在しないのに、変な、景山君と思ったんだけど、景山君の「藤原さん」という問いかけに、なんだか、素直に、「はい」と返事してしまう自分があるの。ホント、変ね。でも、

変から、恋に変わることもあるかしら・・・ああ、恥ずかしい。このことは、景山君には、黙っていてよ。もし、しゃべったら、プライバシーの漏洩問題で、探偵さんを、訴えてやるから、ふふふ。あら、一人で、長話なんかして、ごめんなさい。とにかく、探偵さんに、一言、お礼が言いたくて、電話を掛けたの。本当に、ありがとう」

臭いお婆さんは、匂いお婆さん、いや、失礼、麗しい匂い少女に変わった。俺は、ゆっくりと受話器を置いた。

「先生、よかったですね。受話器から、零れた音で、すべてを聞きました。でも、あの、臭いお婆さんって、勝手ですよ。一方的に、責め立てたり、一方的に、お礼を言ってきたり。そうそう、電話のお礼よりも、調査料、ちゃんと払って貰えるのかしら。そのあたりは、きちんとしないと、事務所の経費だって、馬鹿にならないんだから」

クミちゃんが、俺の傍で、少しずつ、臭いお婆さんになっていく。その時、俺の歴史が動いた。今度は、左手だ。過去二回の経験から、痛みも驚きも、弱ってはいるが、確実に、左手は、露わになっていく。指の先の爪が見え始め、指の第一関節、第二関節、そして、指のつけね。手のひらを事務所の天井にへばりついている蛍光灯にかざす。今まで、見えていたはずの光が、実体化した手に遮断されて、俺の目には届かなくなった。変わりに、生命線とか、知能線とか、勝手に名づけられた、縦横無尽に走っている手のひらの皴が、テレビの走査線のように、俺の目に飛び込んでくる。

青い血管も浮かび上がった。この血管の中を、俺の生きる証明となる血潮が流れているのか。目の前にして、初めて、俺自身が、生きてることが実感できた。もう、一方の、右手を見る。同じように、血管が浮かび上がっている。露わになった途端、毎日の、仕事に忙殺されて、普段は、目にも留めなかった自分自身の体を、じっと見やる、労わることはない。人生とは、何が、きっかけで、変化が起こるか分からないものだ。臭いお婆さんの気体が、俺の左手を固体にしてくれたのだ。

俺が、両手に見入っている間にも、左手は、波が海岸に打ち寄せ、白砂が黒く染まるように、手首、ひじ、力こぶ、肩と実在化していく。これまで見えていた右手で、新たに見えた左腕を撫で、新たに見えた左手で、これまで見えていた右腕を撫でる。見えていても、見えていなくても、感触は同じはずなのに、なぜか、愛おしさが、より一層増す。目が、視覚が触覚の感覚を増幅させるのか。俺の傍らで、一人、臭いお婆さん化していた、クミちゃんが、俺の三度目の異変に気づく。

「先生、また、実在化ですか。今度は、左手ですよ。よかったですね。これで、残りは、左足と胴体部分だけですね。先生が、仕事を通じて、人に喜びを与えるたびに、体が見え始めてくるんですね。今回で、このことが確認できました。もう、少しですよ。多分、あと二回、大きな仕事を成就させれば、先生は、晴れて、普通の人間に戻れるんです」

普通の人間か？普通の人間とは、どういった人間なのか？俺は、よほど、変わっているのか？確かに、体が全部見えない透明人間であったり、体の一部が見える、半透明人間であったり、いわゆる普通の人間とは、見た目において、変わっているが、俺は、俺として生きている。

以前、小学校の総合学習で、島への訪問という課外授業に、警備という立場で、サポートした

ことがある。その島は、港から沖合い4キロ、フェリーで、約20分という近い場所にある。再開発された港頭地区からは、目と鼻の先ほどの近さで、いつも、見慣れた風景の中にあるにも関わらず、島を訪れる地域住民は、決して多くない。その島を訪れたときのことだ。

島には、鬼伝説のゆかりのある、長さ四百メートル程の洞窟が、島の頂上付近にある。島だけに、木や草などの緑の自然が豊富で、トンボなども飛び交っている。名も知らぬ昆虫たちが、自らの生を謳歌している。女子小学生の体に、虫が飛んできた。彼女は、虫の存在自体を否定するかのように、その虫を腕から払い落とす。

「虫なんか、大嫌い」

友だちかどうかはさておき、みんな、みんな、生きているんだ。他の命を無視するものは、他の命の存在を否定するものは、自らも、やがて、誰かに否定されるだろう。俺は、本当に、普通の人間になりたいのだろうか？残された、左足と体を、本当に、見えるようになりたいのだろうか？元の、透明人間の方が、幸せに暮らせるのじゃないだろうか？

とにかく、今の俺の歴史の流れから行けば、予定調和として、他人に、喜びを与えるという数々の論功を行った結果、透明人間から、普通の、見える人間に戻るであろうが、その先が、俺の将来が、全く、見えない。不幸なことだ。沈黙の俺に対し、はしゃぐクミちゃん。クミちゃんは、俺が見える、普通の人間に戻ることを喜んでくれている。

第五章 ある日の木曜日

待ち望もうが、待ち望まなくても、次の日がやってきた。今日は、晴れのち曇り。俺の心と同じ状況だ。透明人間として、ある意味、つまり他人と異なるという点で、虐げられ、差別され、不審がられ、忌み嫌われてきた、この俺が、半分透明人間となり、やがては、普通の人間になれる方向性が見えたわけだが、嬉しいのか、悲しいのか、複雑な気分だ。現状が変わり、新しい道へと進むことへの不安なのか。不安が、不安を一層巻き起こし、俺の心の中は、千々に、万々に乱れ乱れている。どどどどどー。今度は、大きな波が押し寄せてくる。小船にしがみついて、決して、離れない意を決する。小船がひっくり返ったときは、どうなるのか。その時が、俺の最後なのか。半分、船酔い気分のまま、俺は、机に、頬杖をついている。

「先生、お客さんですよ」

いつも、笑顔を絶やさないとはいえず、クミちゃんが、今日は、何故か、よそよそしい。二人だけの職場だ。俺が、今にも潰れそうな個人経営の社長で、クミちゃんは、給料が遅配になることがあるにも関わらず、「社長さんだって、給料貰ってないんでしょう。私、家が裕福ですから、一ヶ月や二ヶ月、一年や二年、一億光年や二億光年、お給料がでなくても、やっていけます」などとは言わないが、一日遅れでも、何とか我慢して、仕事をしてくれる。俺が、飲んだくれで、いつも片手に、大きな氷の塊がぽつねんとはいったウイスキーグラスを傾けている、名探偵シャーロックでもなく、DNAの螺旋構造から、新しい建築方法を二人で思い付いた、ホームズ&ワトソンでもなく、子どもながらも、大人の隠微な世界を感じ取り、見てはいけないもの、知ってはいけないものと感じながらも、つい、図書室の片隅で読み耽り、家に帰ってから、怪人二十面相の仮面が夢に出てきて、恐ろしくて眠れない夜を過ごし、親から、お叱りを受けた、あの明智小五郎（話は何処まで続くのか、もうここらへんでやめときや、と自分で自分に突っ込む）、探偵で、クミちゃんは、その名探偵を支える、ワトソンでもなく、バットの空振りを繰り返して、風の渦巻きを起こし、ピッチャーから投げられたボールを、竜巻旋風で、ホームランにする、あの伝説の野球殿堂の建物の中で、電灯として輝いている、トマソンでもないが、優秀なる相方なのだ。気まずい人間関係は、仕事に大いに影響を与える。ここは、どんな理由があろうとも、機嫌を損ねてはならない。あの原始のような、太陽の微笑の愛を授かりたいのだ。

「ありがとう。クミちゃんの声を見ると、朝から、元気が出るよ。今日も、困っている人のために、お互い頑張りよう」

と、声を掛けるまもなく、ドアは、ドドドーン、グアンチンチョンという爆雷の音が鳴り響いて締め、部屋全体が、防空壕のように、身を潜めてしまった。宙に浮いた俺だけが、見えない手に翻弄されている。空白の頭の中を、甘ったるい、花の匂いを漂わせた声が忍び込んできた。

「ハート印の探偵所は、ここで、いいんですか」

若い女が一人立っていた。クミちゃんよりも若い。女性を年齢だけで判断するのは、どうなんですかと、いつも、クミちゃんには、白い目で睨まれるが、その怒った顔が、キリリと引き締まって、あなたの美を引き立たせるのです、と、まあ、おだて返事をしているが、人は、何か、感覚で、外部を判断せざるを得ない。最も、認知度が高いのが、視覚なのだ。

百聞だろうが、千触だろうが、万嗅だろうが、億舌だろうが、見た目が一番、納得できる。他の感覚器官がよってたかって、自らの反応の確かさを誇ったところで、一見には及ばない。何しろ、目は二つあるんだ。何、耳も二つある、鼻も穴は二つ、おまけに、手の指は、5本で、両手、両足を合わせれば、二十本になる。舌だって、探偵業をしているんだ、五枚ぐらいあっても不思議じゃない。

そう言われれば、そうだ。視覚が、最も正しいなんて、思い上がりもはなはだしいのだろう。そういうことならば、見た目で、人を判断するのは間違っているのか。でも、見た目以外に、預金通帳を見せろとか、子供のときの通信簿を見せろとも、最近の個人情報の守秘義務の点からも、相手に要請はできない。まあ、ひとつの参考資料として、扱わせてもらおう。それでいいよね、俺の体たち。返事がないのは、反対の意思表示がないことだと勝手に承諾させてもらう。

「せんせーい。何を、一人で、喉仏を動かしているんですか。これまで多くの迷える子羊の助けの叫び声に対し、一緒に悩み、苦しむ中で、一筋の、はっきりと照らされた明かりの道を見いだしてくれた、迷、明、名探偵として、有名な、せんせーいに会いにきたんですよ」

瀬戸内海に小船を浮かべたような、ゆったりとした調子の声だ。

「いやー、これは、大変失礼しました。いや、何、散らかし放題の小汚く、掃き溜めのゴミ箱のようなこの事務所に、あなたのような、若くて、きれいな女性に来ていただいたので、少し、動揺しているだけです。ほら、右足と左足が、貧乏ゆすりで震えているでしょう。この建物の構造計算を誤魔化しているために、ビルが揺れているわけではないので、御安心ください。私こそが、あなたの揺れる心をしっかりと抱きとめることができます」

汗を拭きながら、何とか、誤魔化そうとした瞬間、ドアが猛烈な勢いで開いた。そこには、ドラえもののしずかちゃんのように、普段、大人しいはずのクミちゃんが、赤いキャンデーを飲みすぎて、大人になりすぎたのか、腰に手をあて、仁王立ちのまま、顔を真っ赤にして、叫んだ。

「ええ、確かに薄汚れている部屋ですよ。今から、ねずみを始め、ゴキブリなどの害虫駆除を行いますから、お茶はだせませんので、悪しからず」

嵐の後は、いつも静寂から、物事は始まる。クミちゃんの宣戦布告終了後、私と依頼者との表面上の戦いが始まった。私は、ランデブーの方向に進みたいのだが、隣の部屋で、エアスプレーを持ったまま、聞き耳を立てているクミちゃんを意識せざるを得ない。

「あら、お茶なんて、いいの、せんせーい。今朝の五時まで飲んでいたアルコールが、まだ、体の中を駆け巡っているから。お茶よりも、ビールのほうがいいかもね。うふ、うふ、うふ、うふふふ。迎え酒って、体にいいのかしら。でも、盛り上がったままの気持ちを、ずっと維持できるんですもの、きっと、心にはいいはずよ。体と心と、そんなにはっきりと分けることができるのかしら。どちらでもいいですよ、せんせーい。あら、イントネーションが可笑しいかしら。くくくくくーちゃん。もう一杯ちょうだい」

鳩時計が五分もしないうちに、ドアを開けて、時を告げる。

「この事務所には、ビールはもちろん、あなたにあげる水さえもありません。どうしても飲み物が欲しいというなら、水洗トイレで顔でも洗って、出直して、いらっしやい」

クミちゃんの痴漢撃退用エアスプレーがいつ発射されるのか、不安でしかたがない。

「あら、せんせーいのところも水を商いしているの？その点では、私と同じね。それよりも、早速、私の相談に乗っていただけます？話は深刻なの。つまり、これから私とお話をして欲しいの。今だって、十分、話をしているじゃないかだって。そうじゃないわ。今は、私が一方的にしゃべって、せんせーいが、頷ずいているだけ。もしかしたら、心の中で、この女は、何をしゃべっているんだ。俺は、探偵で、テニスの練習の、壁打ちじゃないんだ、ただ単に、しゃべるだけなら、トイレに籠もって、録音でもしていると思っっているんでしょ？」

「いやー、その通りです。あなたは、頭がいい。もう私の出番はありません。唯一、私があなにお手伝いできるとすれば、日本一きれいな公衆便所を、探すことでしょう」

俺は、クミちゃんとの熱い戦いが始まらないように、できるだけ穏便に依頼者を帰そうと思った。だが、女は、俺の心と反対に、どんどんと国境の三十八度線を乗り越えてくる。

「あら、せんせーい、切り替えしが、うまいわね。こんなとき、一世代前の人は、座布団一枚なんて、言ったのでしょ。あたし、某国営放送のテレビ番組のアーカイブズで見たことがあるわ。でも、いまどき、普通の家では、洋風になって、お客様は、ソファーに座ってもらうので、座布団なんて備えてないし、座布団の代わりに、布団が一枚ふっとんだ、さらに続けて、もう一枚、なんておやじギャグを言えばいいのかしら」

俺は、すかさず立ち上がり、椅子のクッションを持ちあげ、彼女に手渡した。

「クッション、一枚。冷たいギャグで、くしゃみをしないように、ハ、ハ、ハ、ハクッション」

隣の部屋から忍び笑いが聞こえる。大成功だ。俺が、今、戦っているのは、目の前の依頼者ではなく、防空壕から、ゴルゴサーティンのように、俺の眉間を狙っているクミちゃんなのだ。彼女に対抗するためには、通常感覚を超えた、第三の目を見開く必要がある。例え、そこを狙われていようとも。

「面白いことを言うのね、せんせーい。ますます、気にいったわ。これからの二人の会話が、きっと弾むはずよ」

依頼者は、全く俺の気持ちを斟酌してくれない。それは、当たり前か。相手はお客さんで、俺は、木戸銭をもらう立場。もちろん、俺は探偵で、お笑い師ではない。女は、言葉を続ける。

「あのね、わたしね、失礼かも、嫌味な言い方かもしれないけれど、左ハンドルの車しか運転したことがないの」

いきなりの相談内容が、金持ちの自慢か？十分嫌味ですよ。お嬢さん。俺だって野球の時は、グローブは左につける。右にグローブなんかつけたことがない。ほかに、左と言え、頭の巻き方が左巻きっていつも友達にいわれる。ほっといてくれだ。俺は変わっているんだ。俺の返答を待たずして、女の話は続く。

「それでね、空港も、成田しか知らないの。羽田って、成田と同じつくりなの？同じ田がつくから、昔は、田んぼだったのかしら。幼虫が成虫となって、羽が生え、成田から羽田まで飛んでいっちゃったのかしら」

残念だが、羽田と成田の間に航空線はない。そりゃあ、突然、飛行機が事故か、台風などの自然現象の影響で着陸しなければならなくなり、成田から羽田に急遽降りることはあるかもしれないが、今までに、そんなことあったかどうかまでは知らない。今度、成田か羽田の空港に、問い

合わせしてみよう。

まあ、それはそれで無事、着陸できればちょっとした東京上空の遊覧飛行かも知れない。命と引き換えのお遊びかもしれないが、人生は、今から一秒、一分、一時間先のことさえ、分からない。安全パイの瓶の中の箱庭では、本当の人生を謳歌、堪能、充実させることはできない。身の毛もよだつほどの、危険と隣り合わせのスリル。それが、生きている証なのだ。

それは、さておいて、成田しか空港を知らないっていうことは、海外旅行しかしたことがないっていうことを自慢したいのか。それとも、成田空港の免税店やコンビニなどで、レジ打ちなどのアルバイトをしているのか。それはともかく、来し方、行く末まで、海外旅行とは縁のない、貧乏探偵の俺にとっては、十分嫌味だ。

もちろん、俺だって、特技の透明の術を使えば、ジェット機に乗り込むことなんか、お茶のこさいさい、料理が得意ですけど、実は、カップヌードルを作ることぐらいです、なんて言うくらい、簡単、簡便、感謝の二の字だ。だが、現実の俺に戻ると、エレベーターやエスカレーターに乗るのが関の山だ。例えば、大江戸線の地下から地上に抜けるのに、走りあがったことがある。エスカレーターに乗っている乗客たちを尻目に、ポポン、ポン、ポン、ポポン、ポン。太鼓が鳴ります、村まつり。今日一日は、農作業の労苦を忘れ、極楽浄土の舞を披露する。体力のある限り、乗降口までの、延々と続く階段を、二段、三段、四段飛ばしと、マイギネスへの挑戦だ。結局、五段飛ばしに挑戦するものの、足のつま先が届かずに、失敗に終わる

人間って、可笑しいことに、哀しいことに、急に、どうでもいいことに力を入れてしまう。道行く乗客の誰かが、拍手してくれる訳でもないし、彼女にかっこいいところ見せようって言う訳でもない。何なんだろう。この湧き上がってくる情熱と勇気と欲望は。自分でも自分を抑えきれないし、いや、返って、もう一人の自分が、自分を鼓舞してくれているんだ。ガンバレ、チャチャチャ。ガンバレ、チャチャチャ。ガンバレ、ガンバレ、ガンバレ、チャチャチャ。

真夏の昼の灼熱地獄の中で、校舎の屋上で、ガクランに身を包み、天に二つに割らさんばかりに、声を大にして叫び続けている、もう一人の自分。そうなりゃあ、誰だって、頑張らないわけにはいかないだろう。自分の応援団が自分なのだから。愛しく、切なく、思わず、ほほずりをしたくなる。

だが、それが、大きな落とし穴となることもある。翌日、足がパパン、パン、パン、サンドイッチに、蒸しパン、ロバのパンだ。下手をすれば、いや、なすびのヘタをとらなくても、ベッドから起き上がれないくらいの筋肉痛となる。もう一人の俺が俺を応援して、もう一人の俺の体が、俺を動かなくさせている。実に、不思議な光景だ。心離幽体現象は、まさにこの事か。

まあ、俺のことは、いい。成田に話を戻さないと。えーと、成田と羽田の田んぼの話だったな。田んぼがどうした。それじゃあ、三田は田んぼが三つでもあったというのかい。うん、そうだったかも知れないな。他に、田が付く名前の地名は、田園調布だ。これは・・・

「それでね、旅行の時の送り迎えは、店のお客さんをお願いしているの。いつも、いつも頼める訳がないし、そんな都合のいい客なんかいないと疑っているのね。それが、大丈夫なの。私のお客さんだけじゃないわ。海外旅行に行く友達四人のうちの誰かのお客さんをつまみ食いしていいの。でも、お客さんとの関係はそれだけよ。ただ、送り迎えしてもらっただけ。手だって握りはしな

いわ。ありがとうのお礼の言葉と目にごみが入ったときのウインクだけで、みんな、満足してくれるわ。優しい言葉に飢えているのかしら、それとも、誰かに優しくすることに飢えているのかしら。どちらだっていいわ。私たちは、初期の目的を達成すればいいのだから。心配しなくてもいいわよ。あなたに、送ってくれなんか頼まないわ。来週、カリブに行くの。二週間の長旅よ。日程と時間を教えるわ。車は右ハンドルでもいいの。こんな安事務所の、探偵さんだと、給料も安いから、どうせ車なんか、持っていないんでしょう。だから、当日は、レンタカーでも構わないわ。あーあ、カリブ旅行が楽しみだわ。早速、荷物を積み込まないと。ディナーに出るための服だけでも、バッグが一杯になっちゃう。できれば、できるだけ、トランクの大きな車をお願いするわ。バックだって、大きいんだから。それに、一人二個から三個は必要なのよ。せんせーい、あなた一人で大丈夫かしら。心配だから、誰か、友だちを連れてきてもいいわ。今回だけ、許してあげる。できるだけ力の強い人をお願いするわ。でも、事務所の女の人はやめてね。なんだか、私に敵意を持っているみたい。でも、大丈夫。同姓からの、妬みや嫉妬には慣れているの。私には、せんせーいのような心強い殿方がついているもの」

さっきまでアッシー君扱いから、今度は、殿様扱いだ。東京ディズニーランドのジェットコースターよりも、持ち上げ方の高低差が大きい。それだけに、心的ショックも大きい。このまま。この女との会話についていけるかどうか心配だ。途中で、落ちやしないかと心配だし、いやー、墮ちてしまいたいくらいだ。

「いやー、お話はよくわかりました。それで、私に相談とは、あなたが、近々、カリブ海へ旅行に行くとき、あなたやあなたの友人、そしてあなたたちの荷物を運ばばいいんですね。それなら、わざわざ、私のような探偵に頼まなくても、人ならタクシーに、荷物なら、白猫印やコウノトリ印の宅急便にでも、お願いすればどうでしょうか」

ここで怒りを顕わにはいけない。どんなことがあっても、客は客だ。相手を怒らせないように、丁寧に、やんわりと断るのが勝ちだ。それが次の仕事につながる。会社とは、永続する生き物。この俺は、その会社に属する、期間限定付の、机や椅子と同様だ。たとえ、個人経営者であっても、客は、ハート印の探偵事務所に引かれてやってくる。個人的魅力なんか、マッチ棒の明かりよりも弱く、暗闇を航行する船舶にとっての灯台はもちろん、誘導灯にも及ばない。

「私ね、カリブは初めてじゃないの。実は、二回目。旅行といっても、ほとんどが、船中での生活で、カリブ海をぐるっと周遊するだけなの。寄港は、一回から二回程度。だから、ほとんどが、海の上で過ごすの。赤ちゃんは、お母さんの羊水の中で、成長するじゃない。だから、船中での生活も、全然苦にならないし、不思議なことに、返って、落ち着く気がするの。何日も、何日も、波に揺られていると、お母さんにゆりかごを揺らされている頃のことを思い出すわ。嘘、もちろん、その頃ことなんか覚えていないわ。でも、お父さんが言っていたの。私が生まれたとき、見えないはずなのに、確かに、唯は目を見開いたって。あっ、ゴメン。自己紹介が遅れたね。私、松野唯です。仕事は、一応、ダンスのインストラクター。以前は、舞台でも踊っていたこともあるけど。足を痛めて、休業中。だからといって、遊んでいるわけにもいけないから、伽場蔵でアルバイトをしているの。でも、本当は、学生時代から、この仕事を続けているから、ダンスをやめたこととは関係ないの。もちろん、親公認よ。うちの親って、その点は、子どもの

ことを理解して、信頼してくれているわ。でも、本当は、お母さんが、ぜひ、やりなさいっていったことも事実なの。変な、親だって？そんなことないわ。実は、お母さんも、若い頃、水商売をしていたから、この仕事に理解があるし、大学に行くよりも、ずっと社会勉強になるはずよ、と推薦してくれたわ。母の折り紙つきだから、一発で推薦入学が決定したわ、うふふ。少し、面白かった？だから、私のお姉ちゃんも、同じアルバイトをしていたの。今では、お店に来てくれたお客さんと結婚して、幸せな生活を送っているの。あーあ、私も、早く、結婚したいわ。誰かいい人いないかしら。話を戻すわね。でも、前回の旅行は最低だったわ。二週間近くも船の中で過ごすから、当然、他のお客さんとも知り合いになって、親しくなるほか、船員とも話す機会があるのだけれど。その時も、船のボーイがどうしてもというから、一緒に食事してあげたの。私たち四人は日本語で、悪口ばかり言ってたわ。だってあまりに見え見えなんだもの。わたしたち、そんな軽く見えるのかしら。ホント、失礼よ。」

「それは、君たち、唯さんたちが悪いんじゃないですよ。そうやってボーイにひっかかったイエローガールがたくさんいるのでしょ。誰だって、一度、美味しい目に会えば、二度、三度と大いに期待するし、例え、夢がかなわなくても、美しいお嬢様方とお話できただけで満足じゃないのですか。気にすることはないですよ」

「気にしてなんかないわ。だってせっかくの女の子四人の最後の旅行だもの。景色だけじゃなく、こうしたアバンチュールも、旅を楽しませてくれる、ひとつのエッセンスになると思うの。ほら、こうして、せんせーいとお話していることも、話題のひとつになるし。日常では、気がつかない、また、気がついて、無視して、通り過ぎてしまうようなことが、旅では、全て、五感に飛び込んできて、受け入れようとするの。旅は、人を大地にしてくれるの。燦燦と降り注ぐ光も、全てを洗い流してくれるスコールも、大地は、全て受け入れるの。だから、いやなボーイたちにも、少しは期待していたことも事実ね、うふふ」

「旅が大地にしてくれるんじゃないで、あなたたち女性が、本来、母なる大地じゃないですか。女は弱し、されど、母は強し。今では、平均寿命をひとつとっても、平時では、母はもちろんのこと、男より、女が強いのではないですか。だから、男性は、女性よりも何とか優位性を保とうとして、力で勝ることだけを武器にして、争いごとを好むのでしょ。いや、DNAが変質した自分たちの存在意義を確認するために、そうせざるを得ないのです」

「あら、せんせーい、いやに、女性を褒め称えてくれるのね。依頼者の私に気兼ねしてくれているの？それとも、受付の人に、気をつけているの、うふふ。どちらにしても、気分がいいわ。ここは、探偵事務所じゃなくて、心のアロマセラピーなのね」

若いおねえちゃんだからといって、なめてかかっちゃいけない。まして、私の背後には、受付のクミちゃんがいる。相手の言葉が甘ったるいからしゃべりだからといって、白い砂糖とは限らない。辛い塩や香辛料が中には混じっている、その分、こちらとしても、用心に用心を重ねて、言葉ひとつひとつに、砂糖をまぶしてお返しする必要がある。それに、敵は目の前だけではない。その背後の茂みにも隠れている。女同士は、たとえ一時期、敵であったとしても、いつ、スクラムを組み、タッグ攻撃を仕掛けてくるかはわからない。どちらにも、微笑と賞賛を！

「カリブ旅行の話は、ここでお終い。次は、私の仕事の話。せんせーいなら、すべて話しても大

丈夫ね。個人情報だから、十分注意して、取り扱って欲しいわ。実は、あたしの仲のいい友達に葵ちゃんって娘がいるの。葵って言うけど、特段、水戸黄門の親戚じゃないけど、うふふ。カリブ旅行にも一緒に行ったことがあるし、今度も一緒よ。その葵ちゃんだけど、伽場蔵は週一回の勤務だけど、仕事の日、指名が二十本近くも入る超売れっ子なの。だから、お客さんなんか、大変よ。だって、葵ちゃん、その日は店に四時間しかいないのに、二十人の人とお相手しなければならないから、お客さんは、十分程度しか、一緒にいられないの。学校の数学も、こういう時に役立つのね。もう少し、勉強していればよかったかしら。でも、お客さんは、それでも満足して帰って行くし、また、翌週、同じ状況なのに、また、葵ちゃんを指名するの。お客さんは、ただ、葵ちゃんを顔が見たいだけなの。指名したいだけなの。葵ちゃんがいるお店で、同じ時間、同じ空気を味わいたいだけなの。そして、葵ちゃんに熱中している自分に満足したいだけなの。でも、お客さんの気持ちも分かる気がするの。あたしたち、伽場蔵嬢も、指名をされれば、その瞬間、そのお客さんに気持ちをあげるの。彼女になってあげるの。恋人になってあげるの。たとえ、十分間といえども。そうすると、お客さんの方も同じよ。お客さんも、私たちに心を与えるわ。家に帰れば、奥さんがいて、子供たちがいて、親兄弟がいようと。この瞬間は、私たちは、二人だけの世界なの。でも、非常なものね。その時間が過ぎ去れば、嫌がる二人をマネージャーが引き離すの。織姫と彦星のように、束の間の逢瀬が終わるわ。私たちキャバクラ嬢は、お客さんと心を通い合わせた十分間だけ切り離して、別の指名の客の所へ行くわ。残された客は、その心を抱いて、家路へと帰るの。でも、その心なんて、一週間も持たないわ。その心が消えそうになる頃、客は、再び、この店にやってきて、私たち伽場蔵嬢の心を買いに来るの。体は売っても、心は売らないわってセリフは聞くけど、私たち伽場蔵嬢は心の一部を売っても、体は売らない。ほんと、変な商売ね。でも、その方が、人間にとっては重い仕打ちよ。一体、私たちの心はどれだけあるのかしら。そんな心を、もし、切り貼りしてつなげたら、地球上をすべて覆いつくせるかもしれないわ。お客さんも一緒だと思う。多分、お客さんの心も、切り刻まれていると思うの。そんな心がこの街には、充満しているわ。そのせいかしら、メイン通りから一歩入ったところにこんな墓地があるなんて。そこには、ほんとに肉体的に死んだ人だけでなく、精神的に死んだ心も埋められているに違いないわ。あの墓標には、ほらあなたの今日のところが貼り付いているかも。よく探せば、あなたの名前が彫りこまれているかも。冗談だって？冗談じゃないわ。冗談でないことは、せんせーい、あなたが一番良く知っているじゃない。別に、せんせーい、あなたを引っ掛けようとも思わない。今こうしてあなたと話をしている時だけが、あなたは私を必要としているし、私もあなたを必要としているのよ。五分後の世界を信じる？五分後には、この街も、この日本も、この世界も、大地震や核戦争で滅亡しているかもしれないの。埋められない心は、浮遊霊のように、この街を彷徨うの。だから、この街は、眠りにつくことがないのかも知れないわ。私の切り刻まれた、切り売りされた、この心も浮かんでいるに違いないの。でも、大丈夫。とかげの尻尾のように、心も再生するの。再生しないと生きていけないの。心が再生しなくなった時が、私たち伽場蔵嬢がこの街から去る時よ。そうしないと、地獄よ。廃人となってこの街をうろつくしかない。それは、お客さんも同じ。私はこの街でまだ五年目だけど、そんな人達をたくさん見てきたわ。最後は、私たち伽場蔵嬢が狂うか、お客さんが狂うか

、どちらかね。そういう意味では、私たち伽場蔵嬢とお客さんは、つかの間の恋人じゃなくて、真剣勝負の決闘かも知れない。駆け引きに敗れた方が、死ぬしかない。丁々発止の言葉の戦いね。心を賭けた戦いかも知れない。詩人となるか、死人となるか。さあ、どちらかしら。せんせーい、わたしたち二人の運命は？」

初対面の伽場蔵嬢に、いきなり、恋愛の真剣勝負を挑まれても、戸惑うしかない。別に、俺は、相談にはのっているが、相手がよくわからないまま、好きになれといわれても困る。特に、男と女の間を、一見客に求められても、たじたじで、後ろに引くしかない。特に、ドア越には、信頼関係で結ばれたと思っ込んでいる我が家の奥の神が控えている。ここは、ひとまず、逃げの一手。

「いやー、私は、退散しますよ。こんな、しがない探偵では、あなたのような魅力溢れた人の足元にも及ばない」

「あら、弱虫ねえ、せんせーい。危険を承知で、飛び込んでいくのが、探偵家業じゃないかしら」

「いやいや、弱虫じゃなくて、私は、この街に住む寄生虫です。この街にしがみついている以上、十分安全を確認しないと飛び込んでいくようなまねはしませんよ。そうしないと、この街で生き残る、生き続けることはできません。それは、あなたのような、伽場蔵嬢も同じじゃないですか」

「うふふ、そうね、寄生虫さん、あなたの言うとおりのよ。安全ドームの中で、恋愛ゲームに現を抜かしているだけなのかもね。それじゃあ、私の、もう一人の友人を紹介するわ。その娘は、冴ちゃんって言うの。冴ちゃんて、居酒屋で働いているって、親とかに言ってるの。でも、年二回は、私たちと一緒に海外旅行に行ってるの。居酒屋のアルバイトで、海外旅行に行けるだけのお金なんて貯まらないよね。可らしい、うふふ。それに、実は、結婚しているの。がーん、だなんて衝撃を受けたかしら。もちろん、お店には内緒よ。このお店でも、あと何人かは、結婚しているか、同棲しているか、している人がいるみたいだと聞いているけど、それもよくはわからない。だって、私たち伽場蔵嬢が、本当のことを言っているかどうかわからないじゃない。それを真剣に議論しても仕方がないし。それに、紙切れ一枚の届出に何の意味があるのかしら。財産や親や子どもなど、自分にとって関係性を築くには有効だけど、この街でひらひらと漂う私たちには、何の安息の手形にはならないの。それで、冴ちゃんの、紙切れ上の、ご主人さんは、家で商売をしているみたいだけど、あまり、うまくいってないみたい。それで、冴ちゃん、まだこの仕事やっているんだけど、ご主人さんにも、伽場蔵で働いていること、内緒みたい。今年中には、この店止めるみたい。そうすると、私、寂しくなるわ。冴ちゃんとは、この店がオープンしてから、五年目になるんだけど、ずっと一緒よ。だから私たち四人はいつも一緒。年二回の海外旅行も一緒。今年は、最後の年になるかも。冴ちゃんも結婚したから、いつまでも、この仕事できないし、葵ちゃんは、恋人がいるから、多分、もう少しで、この仕事やめるわ。葵ちゃんの恋人は、ジャパニーズ事務所のアイドルグループの一人だった人なの。でも、本人は、それを葵ちゃんには言っていないの。偶然、ビデオを見ていたら、その彼が出ていたの。それから、私たち四人は、月に、何回か、集まって、アイドルグループ鑑賞会をするの。誰々さん、かっこいい

とか、言ってね。もちろん、そのグループは、もう解散してしまっているから、いまさら、こんなことでもしかたがないんだけど。女四人の息抜きね、ストレス発散の場よ。いいでしょ？今度は、ここが私の癒しの場所にしてもいいかしら？ふふふ」

一体、どこまでが本気で、どこまでが真実で、どこまでが遊びで、どこまでが相談なのか、俺には全くわからない。いくら、世界がボーダレス化したとしても、これは、単なる感情の垂れ流しではないのか。まして、自分のことじゃなく、他人の情報ばかりだ。それとも一旦、自分が知りえた情報だから、後は、煮て食うなり、焼いて食うなり、自由なのかもしれない。

この葵ちゃんだって、本当に実在しているのかどうか怪しいし、例え、実在していたとしても、この話のとおりかどうかは、疑わしい。ひょっとしたら、葵ちゃんは、自分のことかもしれない。それとも、仲間内のことは、すべてボーダレス化して、意識が拡散し、仲間自体が自分のことになるのか。謎は、深まるばかりだ。相談者の話は、永遠に続く。

「それでね、葵ちゃんたら、マンションに住んでいるんだけど、親には、仕事は花屋さんに勤めているって言っているの。そして、友達二人と一緒に住んでいると言ってるの。ほんとは、一人よ。私も、何度も遊びに行ったりしたわ。でも、その花屋の仕事も、今は、やっていないの。仕事は、週一回の伽場蔵だけ」

「その仕事だけでは、マンション代を払えないでしょう？親が金持ちで、十分な仕送りでもあるのですかね？それとも、俗に言う、血のつながってはいない、パパでもいるんですかね？」

思わず、自分もそうなりたい願望からか、相槌を打ってしまう。援助をしたいのか、援助をされたいのか、その両方だ。

「あら、せんせーい、さすがに探偵さんだけあって、鋭いわね。そう。実は、パパがいるの。月にいくらか、援助してもらっているらしいわ。時々は、お店にも来るわ。葵ちゃんが言うことには、体の関係はないらしいの。でも、私が、ずっと見張っていたわけじゃないから、本当のことかどうかわからないけど、ふふふ」

「ほんとですか？それでは、何故、そのパパさんは、葵ちゃんに、安くはないマンション代を買いでいるんですかね？パパさんの個人的な思いからの慈善事業ですか？」

探偵根性なのか、下司根性なのか、思わず追求の手を深める。

「知らないわ。でも、体の関係がないのは、ありうることよ。私だって、つい、この前、サッカーのワールドカップの決勝戦を観にいったんだけど、そのチケットを手に入れるのに、一枚六万円もかかったって、誘ってくれたお客さんが言ってわ。そのお客さん、三年前から、私を指名してくれていて、食事して同伴とか、店が終わって、アフターでカラオケに行くことあるけど、今までに、手も握ったことないわ」

「私なら、いやですね。手ぐらいは、握りたいですね」

思わず、軽口が飛び出す。

「あら、本当、せんせーい、嬉しいこと言ってくれるのね。じゃあ、今度、お店に来てね。いつでも待っているわ。これ、名刺。この名刺を出してくれたら、おもちゃの箱から、私が現れるの。それで、最初の話に戻るけど、わたしたち、これが最後の旅行かも知れない。冴ちゃんは、結婚しているから、もうすぐ止めると思うし、葵ちゃんだって、彼と結婚するだろうし、もう一人

の仲間の橘ちゃんは、大学四年生だから、卒業しちゃうし。だから、今度の旅行は、みんなで、思い出をいっぱい作るんだ。思い出だけでこれから先の人生が過ごせるように。そして、わたし、あと一年間はこの店にいると思うの。本当だったら、伽場蔵で五年も働いていると、次のステップで、倶楽部に移るんだけど。でも、お店が変わると、一からお客さんが変わるので、めんどくさい気もする。こうして、ここの店にいれば、それなりに、お客さんも指名してくれるし、店長もわたしのことわかってきている。その代わりに、他の女の子がいやがるいやな客でも相手をするし、仕事だって、他に女の子がいなければ、店のために、延長しているの。休みの日だって、呼び出されたら、雨が降ろうが、雪が降ろうが、一時間かけて、この店に来るよ。人生、全て、バーターなのよ。もちろん、ビジネスだけのために、働いているわけじゃないの。わたし、この仕事が本当に好きなのよ。この仕事から離れられないの。いつまでも、いつまでもお店に出て、あなたのようなお客さんと、楽しい時間を過ごしたいの。それが、無理だとわかっているから、よけいに切なくなるの。関係性が、切っても、切れないから、切ないのかしら。日本語って、うまく表現しているのね。あら、変なことに、感動しちゃった。でも、感動って、サントクロースのように、思いもかけないところからやってくるのじゃないかな。期待半分、絶望半分」

舞台上、ピンスポットを浴びている彼女の、少し鼻にかかった歌声が、続く。観客は、私と、裏方のクミちゃんのみ。もちろん、入場料を払うのは、彼女である。みんな、一生に一度でいいから、桧舞台にあがりたい。照明を一身に受けたい。それが駄目なら、二十パーセント割引となるチケットを握り締め、1時間五百円のカラオケボックスに飛び込むのだ。そこには、天国の演奏場が待っている。俺は、引き続き、彼女の周り舞台に光を当て続ける。

「今、一番指名をうけている子には、頑張ってもらいたいと思うわ。私もこの店がオープン時のときは、指名が一番だったときがあるの。それだから、指名が多い時の喜びも、少ない時の悲しみもわかるし、それに、誰の指名だろうと、お店に、お客さんが多い方が、私たち伽場蔵嬢も活気があって、楽しいの。せんせーいも、是非、お店にいらっしやいよ。ほかのお客さんが帰ったあとは、すぐに、全員に取り囲まれて、秘密の花園の気分を味わえられるわ」

「花園に迷い込むのは嬉しいけれど、残念ながら、私はミツバチにはなれません。花から花へと、器用に飛び移ることなんかはできません。花を愛するのは、目の前にいるあなただけで、十分です」

と言いながら、内心は、部屋の外で、耳だけが、いちじくの葉のように膨れ上がり、手には、嫉妬という名の金棒を持って立ち尽くしている仁王に話しかけているのだ。

「あら、探偵さん、嬉しいことを言ってくれるわね。でも、あなたに、自由に飛び回れるミツバチになれなんていっていないわ。あなたは、箱に入ったミツバチ。蜜を吸わせるかどうかは私たちが決めるのよ。うふふ」

やはり、この物語の主人公は、終始、彼女である。いくら、ストーリーをこちらに引き戻そうとしても、大海原の小船、いや、一枚の木の葉のように、彼女に翻弄され続けている。なんとか、打開策を見出そうと、私は席を立ち、窓際へと進む。

「ここからの眺めはどうですか」

ここは、おんぼろビルの三階だ。周りの高層ビルに囲まれて、たいした眺望はきかない。それでも、一日中、資料整理に追われて、部屋に閉じこもっていると、無性に、窓の外が見たくなる。外の世界に飛び込んでみたくなる。彼女にも、俺の気持ちを伝えたいためにとりあえず声を掛ける。

「ありがとう。今、自分が置かれている状況だけを見つめていても、なんの解決策は見つからなさそうね。高いところから、ちっぽけな自分を見つめ直すことも大事よね」

伽場蔵女は、妙にしおらしいことを言って、立ち上がったものの、窓側には近よらず、反対のドアの方へと向かった。

「さようなら。楽しかったわ。なんだか、自分の進む方向が見つかったみたい。来月は、カリブ海よ。これから、また、お仕事を頑張ってお金をためなきゃ。旅行の出発の際は、連絡するわ。もちろん、荷物なんか運ばなくてもいいから。ポケモンのジェット機を見に来るついででいいかの。あら、なんだか私、少し弱気みたい。でも、今日は、本当に元気づけられたみたい。ありがとう」

「お礼を言うのはこちらです。どうもありがとう。伽場蔵詩人さん」

最後は、洒落のつもりだが、果たして彼女に通じているのかどうか。また、本当に、彼女の役にたったのかどうか。どちらにせよ、答えは、全て、彼女自身が握っている。ただ、その答えの正当性を確信・確認するために、誰かに、少し後ろから、背中を押してもらいたいだけなのだ。彼女のような美人なら、喜んで、背中を押そう。もちろん、固体と固体の間に、気体を介在しての話だが。

おおおおおっと、ドアが閉まる音と同時に、再び、これで四度目の激しい痛みが押し寄せてきた。痛みも、苦しみも、四度目になると、ほとんど和らいでくる。それどころか、今度は、どんな痛みなのか、痛みの種類に期待してしまう。真っ赤に燃え上がった鉄で、焼き印を入れられた感じなのか。外からの傷みじゃなく、腹痛のように、中から突き上げてくる傷みなのか。

個人的には、内からの痛みよりも、外傷の方がいい。痛みの部分や程度を、自分の目で確認できるし、治癒していく状況がわかるからだ。また、直接、痛みの部分を、押さえることができるからだ。また、包帯やバンソウ膏で傷を覆えば、他人の目にも触れ、同情から、惻隠、憐憫の情を受けることができる。

あら、探偵さん、その傷どうしたんですか？本当に、痛々しいですね。お体に気をつけてくださいね。私がお願いしていた、浮気現場の証拠写真を撮影する仕事ですか？いえいえ、そんなこと、別に急ぎませんよ。まずは、その傷をゆっくりと癒してください。探偵さんの傷が癒える頃、私の心の傷も治りますよ。お金の心配ですか。お陰で、もうすっかり立ち直りました。人って不思議ですね。他人が苦しんでいる姿をみると、自分の悲しみや痛みがちっぽけなものにみえてきて、どうでもよくなりました。契約金ですか。どうぞ、どうぞ、財布にお仕舞いになってください。お見舞いではないですけど、預かってください。なんて、とんとんなのか、すーっとなのか、上手い具合に物事が進みそうな気がする。

その点、腹痛や下痢などの、内臓器官の痛みは、困る。誰だって、経験はあるだろうが、地中

深く何千メートルを発信場所の痛みは、手が届かない。もどかしいまでに、手をくねらせる。まるで、体中真っ白の前衛舞踏家のように、右ひざをくの字、左足は、右足に巻きつけ、右手は背中の左の肩甲骨を掴み、左手は右手のひじを持つ。永遠に閉ざされた次元の世界で、完了した生活を行うかのようだ。そして、俺の左足が現れた。ぽっかりと俺の心臓だけが空いたままになっている。

第六章 ある日の金曜日

今週は、俺にとって、激動の一週間だったように思う。月曜日の、お墓おばあさんから始まり、火曜日の、犬おばさん、水曜日の、臭いおばさん、木曜日の、伽場蔵嬢。彼女たちの笑顔とともに、俺の、右足、右手、左手、左足が、透明から、見える状態に、戻った。後残すは、胴体のみ。中途半端な、残り方に、いささか戸惑いながらも、後は、なるようになるという気持ちで、望むしかない。最後の胴体を取り戻すのは、一体、どんな客で、どんな願い事なのだろうか。期待半分と不安半分のまなざしで、じっとお客の来るドアを見つめている。そこに、ノックの音が。

「先生、失礼します」

クミちゃんが、妙にしおらしく立って居る。

「どうしたんだい、クミちゃん？」

俺は、手も、足もさらけ出したまま、彼女に話しかける。下心も、腹蔵も、透明なままだ。

「昨日は、すいませんでした。私、どうかしてたんです。先生が、折角、普通の人間に戻る機会なのに、お客さんに対して、失礼な態度をとったりして、申し訳なかったです」

クミちゃんは、そう言うと、頭をぺこりと下げて、部屋を出ようとした。俺は、慌てて、彼女を呼び止める。

「いやー、別に、そんなこと気にしていないよ。うちに来る、クライアントは、とにかく、変な人ばかりだし、クミちゃんだって、電話や直接窓口で、怒鳴られたりして、大変だと思うよ、そんなこと、気にしていたら、この業界ではやっていけないよ。確かに、昨日相談に来た、伽場蔵嬢も、変わっていたね。クミちゃんのとった態度は、全然、気にしていないから。ほら、その証拠に、」

俺は、シャツを脱ぎ、透明のお腹をクミちゃんに見せる。

「先生、真っ白じゃなくて、向こうが見えるくらい透明ですよ」

クミちゃんは、予定通り、俺のギャグに応えてくれた。知らない間に、彼女との間が、より一層近づいたような気がする。

「先生、ありがとうございます。昨日、家に帰ってから、自己嫌悪に陥って、気持ちが暗く沈んでいたんですけど、お陰で、気持ちが、晴れてきました。今日から、気持ちを入れ替えて、仕事に頑張ります。よろしく願います」

彼女の健気な態度に、心が揺れ動く。俺は、自分が、普通の人間じゃなく、透明人間だということで、これまで他人に、あまり気を許すことはなかった。近づいても、結局は、透明人間だとわかり、人は、俺から離れていくのだ。その点、彼女だけは、これまで、俺を普通の人と同様につきあってくれた。時には、冗談を言い、時には、悩んだりもしてきた。

俺は、彼女に尋ねた。

「話は変わるけど、クミちゃんは、どうして、この事務所で働いているの？透明人間が、探偵だなんて、気持ち悪くないかな」

「うーん、難しい質問ですね。それは、最初は、先生が、透明人間だと分かったときは、しま

った、変な事務所に来てしまったと思いましたけど、体が透明か見えているかだけのことで、その人の性格とは全く関係ないし、走るのが速い人が、マラソンランナーや短距離選手として活躍するのと同じように、透明人間が、探偵として、自らの才能を活かすのは、別に、不思議なことじゃないと思います。逆に、うらやましいとか、憧れさえ、感じます。それに、先生は、体は透明ですが、今では、ほとんど見えていますけれど、心は、透明じゃないですよ。暖かい、ハートの形が、私には、はっきりと見えます。さすが、ハート印の探偵事務所ですね」

俺の心は喜びに打ち震えた。これまで、探偵家業という、決して、陽の当たることのない、裏方の世界に暮らし、仕事とは言え、人助けをしているのだという自負心があった。様々な問題に対して、不眠不休で望んだ結果、解決に至り、感謝されたことも多々あった。

だが、人からこうして、しかも身近で、少なからず好意を持つクミちゃんに、こうも誉められるとは。これまでの人生は、感情面においては、受身ばかりあったような気がする。透明人間という境遇に生まれ、他人とは違うということで、知らない間に、自らの感情も透明化しすぎてしまったのかもしれない。

だけど、今は、違う。クミちゃんからの言葉で、今、俺の見えないハートは、はっきりと形となって現れた。その時だ。俺の顔に、熱い血潮が、心臓から送り出されてきた。顔が、焼けるように熱い。一旦、顔に送り込まれた血液は、首、胸、お腹へと、じわりと浸透していく。クミちゃんの、驚きの声が、事務所中に、はね返る。

「先生、顔が、体が、見えてきましたよ」

俺は、顔を覆っていた手はずし、窓に振り返る。うっすらと、俺の顔が見える。俺の腹も輪郭がはっきりとしてきた。人間の形を、他人を見ることでしか認識できなかったが、今、まさに、自分の存在がはっきりとわかる。ガラスの向こうの俺が、複雑な顔で笑っている。

まだ、俺は、この現実を直視できないのかもしれない。恐る恐る部屋に掛けている身だしなみ用の鏡に近づく。見えた。確かに、俺の顔だ。眉毛（少し、ゲジゲジだ、しかも、三日月の突端が少し欠けている。クミちゃんに眉毛を少し描いてもらおう）も、目（意外だ。二重まぶたで、目がパッチリとしている。人は見かけで決まり、目は口ほどに物を言うことから、満点の出来だ。今後の、商売にも役に立つ）も、鼻（可も不可もなく。ちゃんと呼吸さえできればそれでよい。高からず、低からず、謙虚な人生を歩むだけだ）も、口（唇はやや厚め、熱いものを食べるときは、少し気をつけないと、たらこ唇が二倍に膨れ上がる恐れがある。また、食事の際に、誤って、唇を噛んでしまうこともあるだろう。うっすらと滲んだ血を舐めながら、血潮を感じる。少し、しょっぱいな。海の水が塩辛いと同様に、人間の体の中で、ギーコ、ギーコと今日を生きる意思の臼が回っているのだろう。血潮を無駄にしないためにも、鏡を見ながら、ごはんを食べよう）も、耳（耳たぶが少し足れている。いわゆる福耳か。力を入れてみたが、前後、左右に動く気配はない。人類で初めて、道具を使わずに、自らの器官だけで、空を飛べる夢は終わった）も、髪の毛（これまで、髪の毛がうっとおしいくらい長く伸びたとき、見えないことをいいことに、自分で、適当にカットしていた。その証拠に、前髪や後髪が揃わず、段々畑のようになっている。これからは、散髪屋に行く必要がある。ひょっとしたら、クミちゃんにお願いできるかも。どちらにせよ、只というわけにはいかない。これからは、物入りだ。透明人間だった

ときのほうが、エコ生活だったのかもしれない)も、全て、揃っている。

まじまじと自分を見たことがないだけに、何か、少し、違和感がある。この顔を、これまで、三十数年間、連れ添ってきた自負心はない。朝、昼、晩と何かにつけて、顔は洗ってきたので、爽やかさ、清潔さは誇れるが、自信を持てるほどの自信はない。これから、死ぬまで、一生、この顔と付き合っていくのか。そう思うと、顔が赤みを帯びてきた。穴があったら、顔を埋めたい。

「先生、私が、思っていたとおり、かっこいいし、爽やかですね。声が、渋いだけに、きっと、顔立ちも整っているはずだと思っていました。先生の髪、乱れていますね。明日にでも、ハサミを持って、私がカットしてあげます。これまでの、カットされていた人生を私が、繋げてあげますよ。私、この事務所に、ずっといてもいいですか」

今の俺には、肯定の、二文字しかない。思わず、頷いた。

「よろしく、お願いします」

第七章 ある日の土曜日

「ひー、ひー、ふー、はい、力んで。はい、ひー、ひー、ふー」

助産師の力強い掛け声が、分娩室に響く。それに合わせて、母体の方も、ひー、ひー、ふー。ひー、ひー、ふーの音が、狭い分娩室の中で木霊する、新たな、生命の誕生の瞬間だ。空の精霊、海の精霊、山の精霊が、一緒になって、声援してくれる。

俺も、負けじと、母体に合わせて、みー、みー、よー、と小さく声を合わせる。どこまでも、どこにいても、俺は、俺の性格を貫く。いつー、むー、やー、こー、ひとつ戻って、ややよ、生まれいでよ。もうこの部屋に入って何時間がたつのだろうかと思った瞬間。

ふぎゃー、んぎゃー、ふぎゃー、んぎゃー。

と歓喜の音がする。

生まれた、やっと生まれた。念願だった、俺の血を引く、子ども。透明人間から、普通の実体化された人間へと生まれ変わった俺が、こうして、普通の生活をしているとは、驚きだ。

「お父さん、感激しているのはいいですが、あなたのお子さんを抱いてみますか」

看護師の声に促されて、脳は、現実との会話を優先した。

「もちろん、私の可愛い子どもです」

張り切って、大声を上げた後、引き続いて、驚きの声を上げた。

看護師に抱きかかれたはずの、我が子の姿が、俺には見えない。

「どうしたんですか、お父さん？ほら、あなたに抱かれないと、泣いていますよ」

泣きたくなるのは、こちらのほうだ。早く、普通の人間に戻りたいと叫んで、元にもどったはずなのに、生まれてきた子どもが透明人間だなんて。看護師たちは、俺をかばって、何も言わないだけなのか。呆然とただ、立ち尽くすのみの俺に、妻こと、クミちゃんから声がかかる。

「あなた、私とあなたの子どもよ。赤ちゃん可愛い？」

「ああ、可愛いとも、目にもいれても痛くないよ。もちろん、コンタクトレンズの代わりじゃないけど」

俺は、実体しないが、少し体温が高い赤ちゃんを抱きながら、こう呟いた。

俺そっくりの、は、だ、か、の、お、う、さ、ま、よ。人は、誰でも、裸で生まれきて、成長するにつれて、透明の心に、七色の変化自由な服を身に着けるものなのさ。まだ、名もなき、我が子に、幸あれ。そして、は、だ、かで、力強く生きろ。